かぐらおか

(題字は初代学長　山田守英 氏)

第113号

平成15年5月30日

編集　旭川医科大学
教務・厚生委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

美瑛の丘　暮色　　(写真撮影　入学主幹専門員　佐藤　安一)

新入生を歓迎して……久保　良彦…2
大雪を眺めながら(新入生を迎えて)…高橋　雅治…3
看護学科の新入生を迎えて……松浦　和代…4
平成15年度医学科入学者名簿……5
平成15年度看護学科入学者名簿……6
平成15年度看護学科第3学年編入学者名簿……6
新入生を迎えて……八戸　大輔…7
新入生を迎えて……斉藤　貴史…7
旭川医科大学に入学して……高橋　賢伍…8
「旭川医科大学に入学して」……高橋　健太…8
旭川医科大学に入学して……阿部明日美…9
旭川医科大学に入学して……石塚　直子…9
オーストリア・スイス視察旅行を終えて…田中　剛…10
古代と近代の癒しの場所を訪れて…松岡　悦子…11
海外視察報告……笠原　直邦…12
授業評価の公表……13
平成15年度大学院入学者名簿……37
新入生歓迎合宿が終わって……37
研究室紹介……38
外国人留学生一覧……38
学生団体一覧……39
第45回東日本医科学生総合体育大会……40
平成14年度　学位記授与式……41
平成15年度　入学式……41
新入生合同研修実施される……41
訃報……42
教官の異動……42
窓外……42

新入生を歓迎して

旭川医科大学長　久　保　良　彦

雪解けは遅れていますが、例年通り、本学は新しいエネルギー、すなわち、医学科第１学年90名、看護学科第１学年60名、同じく看護学科第３学年編入者10名の皆さんを迎えることができました。私共本学教職員は双手を挙げて皆さんを歓迎いたします。

医療にかかわって病に悩む患者を救おう、あるいは研究者として生物や疾病の謎解きを目指し、苛酷でしかも社会から求められることの多い医師や看護師の道を選ばれた皆さんの高い志に深く敬意を表します。

今後、その志を大切にはぐくみ、大きく、逞しく育てて行かれることを願っております。

さて、過ぎ去ったばかりの20世紀の医学医療は、大づかみしますと、前半は結核など感染症が主役の時代、後半は生活習慣病やアルツハイマー病に代表される加令に伴う疾患の時代とくくることができます。この世紀の特に後半にみられた生命科学・医学の進歩はまことに目を瞠るばかりであったことは申し上げるまでもありません。生活の営みや病気を起こす原因物質を追求する要素還元主義に準ずる研究は分子レベルから遺伝子レベルへと進められ、ヒトゲノムの解読に至りました。

このような20世紀の推移を受けて新しい世紀では、ポストゲノム医学と再生医学が最も大きな研究のテーマになるといわれております。そうなりますと、発生に係わる個々の遺伝子の働きの解明が新たな出発点となり、前の世紀で辿った経路と逆になる方向―いいかえると遺伝子から組立てて、分子レベル、さらに細胞レベルからシステムへという道を21世紀の生命科学は進むことになりましょう。

まだ先の話になると思われますが、ポストゲノム医学あるいは再生医学が現実の話になりますと、究極の医学といえる「個の医学」、すなわち、一人ひとりに対応した医療が可能になるというすばらしい展望がみなさんの将来に開けてくるのであります。

このように人間の体を科学する生命科学や医学は限りない進歩が期待される一方には、その医学を臨床に応用し、直に病める人間一人ひとりをケアする体系である医療があります。このことは、病を知り、それを治すことに専念するだけでは充分ではなく、病んでいる患者の人間全体を常に念頭に置かなければならないことを意味しております。患者は体が病に侵されているだけでなく、病によって心も病んでいるからです。心と体は分けることが出来ない関係にあります。このように、病める人間一人ひとりをケアするとは、病んだ体と共にその心も理解出来なければならないことになります。

医学や看護学を学ぼうとしておられる皆さんは医学・看護学はもちろんですが、それに加えて他の自然科学、さらには文学や哲学などに日頃から親しまれて自らの心を養い、より高い人格の形成に努められると共に人間理解を深めていっていただきたいと願っております。

本学入学後、皆さんは直接あるいは間接に身近に経験される変革があります。

その一つは明年４月から本学を含めてわが国の国立大学が法人化されることです。これまで国の行政組織の一部であった国立大学が大学毎に法人として独立した存在になるということです。大学の最も大切な使命である教育・研究の機能の向上に繋がる改革と期待されております。

二つ目は医学教育の改革であります。生命科学・医学にみられる革命的な進歩や社会・経済の変化に対応し、医学という実学の教育によりふさわしい内容になるように教育手法の工夫と共にカリキュラムの吟味が重ねられております。明治維新後、制度として始められたわが国の医学教育が初めて経験する大きな改革であります。

皆さんは丁度わが国の国立大学あるいは医学教育の変革期に本学に学ぶことになりあるいは大きな不安を感じられるかも知れません。しかしこのことは皆さんにとってむしろ幸運なめぐり合わせと喜んでいただきたいと思うのです。何故ならよりよい教育を受けることが約束されているようなものであるからです。その教育をさらに効果的にするには与えられるものを学ぶのではなく積極的に自ら学ぶという皆さん一人ひとりの姿勢を欠くことができません。

繰り返しになりますが、皆さんが本学において医学・看護学を存分に学ばれると共に人間性の淘冶に努められることを心から祈念致します。

平成15年４月15日

大雪を眺めながら（医学科新入生を迎えて）

医学科第１学年担当　高　橋　雅　治

今年の入学式は快晴であった。澄み切った大雪山系に見守られながら、新入生が校舎に集まった。式場は、清々しい緊張感で満ちていた。皆の心には、医療従事者として活躍したいという夢と、果たして良き医療従事者になれるのだろうか、という不安が入り混じっていたように思う。

入学式の間、自分が大学生だった頃を思い出していた。当時の自分は行動科学を専攻し、研究の道を志していた。その頃の自分もまた、研究者として活躍したいという夢と、果たして研究者になれるのだろうか、という不安の入り交じった日々を送っていた。研究の面白さに取り付かれ、動物実験に明け暮れる充実した毎日であったが、研究や教育で生計を立てていけるのだろうかという不安に満ちた日々でもあった。

新入生の皆さんの中には、自らの夢を一刻も早くかなえて、不安のない安定した日々を送りたいと思っている方がいるかもしれない。夢が大きければ、それだけ不安も大きくなるので、夢は早くかなえることにこしたことはない。新入生のみなさんが各自の夢をかなえることは、学年担当である自分の切なる望みでもある。

だが、実際のところ、人生はいつまでたっても安定しない。自分の例を挙げれば、念願が叶って研究・教育の職についたときは、これで一安心と思ったものである。ところが、その立場に慣れてくるにつれて、次はああいう研究にチャレンジしたい、今度はこういう研究プロジェクトを作りたい、というような新たな夢が次々に生まれてくる。そして、それらの夢を追いかけてリスキーな道に進めば、この道ではうまく行かないのではないかという新たな不安が生まれる。人生はその繰り返しのようなところがあって、結局のところ、いつまでたっても安定しないのである。従って、夢の実現が遅れたからといって、それほど焦ることはない。

それよりも、夢と現実との折り合いの付けかたの方が重要である。人生には山もあれば谷もあり、時には、夢や理想を棚上げしなければならないこともある。たとえば、自分の能力的な限界を思い知ることもあれば、望んだ立場に就けないこともあるだろう。場合によっては、あまりに厳しい現実がみなさんの夢や理想自体を強制的にねじ曲げようとするかもしれない。

そのような時には、現実との妥協も止むを得ないことかもしれない。夢や理想にとらわれて、現実との狭間で不適応を起こしてしまってはなんにもならない。実際、人間のエネルギーには限界があるので、全てのことに夢や理想を持ち続けることは不可能である。

だが、現実との全面的な妥協のみを繰り返す人生は、一見、適応度が高いようで、実際には当人の精神衛生を悪化させ、最終的には幸福感の少ない人生で終わってしまうに違いない。反対に、自分の夢や理想を持ち続けている人は、短期的に見た場合にはたびたび不利益を被っていたとしても、精神的には幸せであることが多い。

新入生の皆さんが、将来、厳しい現実に直面して不本意な妥協を繰り返すことになっても、それは現実に対する適応の一形態であって、仕方がないことかもしれない。だが、出来ることならば、生涯にわたって夢や理想を持ち続けられることを、ひとつでもふたつでもいいから見つけて欲しい。それを見つけることが出来たら、人生は本当に楽しい。遠い将来に、夢と現実との折り合いがうまく行かなくなったときに、この学舎で大雪を眺めながら夢と理想に心を震わせていた自分を思い出してもらえたらと思う。

（心理学　教授）

看護学科の新入生を迎えて

看護学科第１学年担当　松　浦　和　代

平成15年度医学部看護学科新入生とご父兄の皆様に、心からお祝いを申し上げます。

数年前の話になりますが、新入生研修会で本学保健管理センターの武井明先生が、「居場所探し」という講演をされたことがありました。新入生が少しでも早く大学環境や新しい生活に慣れ、心身共に豊かで明るい学生生活を送ることができるようになるためには、まず新しい仲間をつくり、自分の新しい居場所をみつけることが大切です、という内容でした。最も関心の高い話題であったのでしょう、新入生の熱心な聴講態度が印象的でした。

当時の新入生研修会は一泊二日の宿泊研修でした。夕食の後に学生の交流会が催されたのですが、その演目のひとつに「新・赤ずきんちゃん」という寸劇がありました。筋書は、主人公の赤ずきんちゃんがおばあさんのお見舞いに行く途中で寄り道をして花を摘んでいると、よこしまな狼が彼女に目をつけます。狼は赤ずきんちゃんの先回りをしておばあさんを食べてしまいます。そしておばあさんになりすまし、赤ずきんちゃんが訪ねてくるのを待っている、と、ここまでが第１幕でした。

第２幕は、三匹の子豚が、末っ子豚の建てた煉瓦の家で仲良く暮らしているところから始まります。そこへ、狼に追われ「きゃー」と悲鳴をあげながら逃げ惑う赤ずきんちゃんが登場します。三匹の子豚は赤ずきんちゃんの窮地を救い、狼の開腹手術をし（おばあさんを救出し）、その後狼を更生させ、みんなで助け合いながら暮らしました、幕、というものでした。

私の文章力では到底その時の情景や迫力を再現できないのですが、脚色・演出・演技と三拍子揃って素晴らしく、学生も教官も涙を流しながら大笑いしたことを憶えています。

「赤ずきん」と「３匹の子豚」は誰もが幼い頃から知っている童話です。しかし、私はそれまで一度も、赤ずきんちゃんと三匹の子豚が同じ町内に住んでおり、狼は町内のもて余し者であった、という発想をしたことがありませんでした。学生達のそうした柔軟な発想に私は「あっ」と驚かされましたし、上質なユーモアのセンスにも感心させられました。さらに、この劇は、武井先生のご講演の要点を実に的確にとらえており、学生達の知性の高さを感じさせてくれるものでした。この学生達はどのように友人をつくり大学生活を送り、さらにはどんな看護職者に成長していくのだろうか、私は強い関心を抱きました。

そして今年、４月11日の新入生ガイダンスで新入生の皆さんと正面からお会いした時に、この「新・赤ずきんちゃん」を感慨深く思い出しました。皆さんは期待に胸を膨らませて、大学生活を始められたことと思います。しかし、「新しさ」というものは不安を伴うものでもあるということを、実感しておられるのではないでしょうか。

こうした変化から生ずるストレッサーに、皆さんはうまく対処して行かなければなりません。武井先生が述べておられたように、新しい仲間をつくり、新しい居場所をみつけてください。時にはそれが困難に感じられることもあるでしょう。でも、ちょっと目線を変えれば、物事は明るい展開をみせるものです。三匹の子豚だけでなく、七匹の子やぎもピーターもみんな同じ町内にいて、同じ悩みを抱えているのかもしれないのです。

赤ずきんちゃんが三匹の子豚に出会えたように、皆さんが生涯の友人を大学生活で得ることができ、そしてお互いを「世界でたった一つの花」として尊重し合い、充実した学生生活を謳歌されるよう願っています。

（看護学　教授）

平成15年度 旭川医科大学入学式
医学科

平成15年度 旭川医科大学入学式
看護学科

新入生を迎えて

医学科第6学年　八　戸　大　輔

新入生の皆さん入学おめでとうございます。今はどのような気持ちで新しい生活をお過ごしでしょうか。

今、入学した頃の自分を思い出すと、まだ先の長い大学生活に何をすべきか迷っていたように思います。そんなときに入部したのがバスケット部でした。当初は休みがちでしたが、いい先輩、いい仲間たちに恵まれていることに幸いにも気づき、次第に部活に真剣に打ち込むようになっていきました。1年生時の東医体はベスト16でしたが、その後一歩一歩着実に成績を上げていき、昨年主将として挑んだ東医体はついに初優勝を果たしました。この優勝はいろいろな人との出会い、つながり、そして支えがあったからこそ達成できたものです。この5年間で、先輩はもちろん同学年の友達、後輩との触れ合いの中で“人とのつながり”の大切さを実感できたのが大きな、大きな収穫だったと考えています。他にもたくさん得たものがありますが、これらのものを少しでも後輩に伝えられたら…と、もう一年部活をやることを決意しました。

部活のことを中心に書きましたが、以上のようなことは勉強でも、大学生活でも、病棟実習でも、アルバイトでも同じでしょう。最近は病棟に出て患者さん、先生方などたくさんの人と触れ合う機会に恵まれており、人との触れ合いを大切にしていきたいと考えながら実習をさせていただいています。当然の如く私はまだまだ未熟者ですが、このように“人とのつながり”を大事にすることで人間の幅が広がり、豊かな人間性を得られるのではないでしょうか。将来的には、患者－医師の良好な関係を築くことにもつながっていくと思います。

私の場合は部活をやり通すことで、これからも大切にしていきたいものを見つけることができました。みなさんも何か一つでもよいのでやり通して下さい。きっとかけがえのないものを見つけることができると思います。どうぞ充実した6年間を過ごして下さい。

新入生を迎えて

看護学科第4学年　斉　藤　貴　史

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

受験という大きな壁を越え、これから始まる大学生活に大きな期待、希望そして不安でいっぱいだと思います。看護学科の皆さんは、4年間この大学で学んでいくことと思いますが、この4年間は思ったよりも早く過ぎ去ってしまいます。皆さんには、これからのこの大学生活をいかに充実して過ごすかということを考えていただきたいなと思います。

大学生活では、講義や実習などの勉強を積み重ねて一般教養や専門的な知識を身につけることはもちろん大切なことですが、自分自身の人間性の幅を広げることや主体性を持って行動することも大学生として、また個性を磨くという意味で大切なことだと思います。そして、比較的時間にゆとりのある学生だからこそできることもたくさんあると思います。

本学では、部活動やサークル活動も盛んです。こういった活動を利用して、さまざまな人生経験をしてきた人たちとの交流を深めたり、仲間と一緒に遊んだりするのもいいと思います。そうすることによって、人間性や物事の考え方などをより深く、柔軟にすることが十分可能になると思います。そして、学外での生活にしても、バイトやさまざまな交流を通して経験できることも多くあるでしょう。人と接する職業に就く人間にとって、人とのコミュニケーションを上手にとるために必要な知識や経験に無駄なことなどないのだと思います。それを、大切にして積極的に何事にも取り組んでみるといいかもしれません。そして、それが自分自身を伸ばす糧となり、それぞれの将来の目標に近づくことになればいいなと思います。

4年間という大学生活の中では、苦しんだり悩んだりするときがあると思いますが、それ以上にすばらしい出来事もあります。けれども、その大学生活を充実して過ごすためには自分自身で考え行動しなければなりません。どうぞ、楽しく充実した学生生活を送ってください。

旭川医科大学に入学して

医学科第１学年　髙　橋　賢伍

ついに医学部に入学することができました。まずは、そのことを何よりも喜んでいます。今までの苦しかった受験勉強、ストレスで20kgも太ったりして本当につらかった。推薦での合格ではあるが本当にうれしいです。合格書がきたときは、受験中に僕を支えてくれていた母と涙を流して喜びました。一緒に受験勉強を頑張った仲間とも喜び合いました。そんなこんなで、この春から北海道での僕の一人暮らしの幕が上げられました。

もとは、徳島という四国の、どちらかというと暑い所に住んでいたので、僕にとって北海道は未知の島でした。もしかしたら一年中雪が降っているのではないか、などと、馬鹿なことを考えていました。しかも、それに加えて初めての一人暮らしだったので、本当に不安でいっぱいでした。今まで頼ることができた父や母には、もう頼ることができない。頼れるのは自分だけだ、などと思っていました。

しかし、入学式が終わり何日かたつと、それは、まったくの間違いであることに気付きました。助け合える友達、何かと僕たちのことを心配したり、やさしくしてくれる先輩方、こんなすばらしい環境で、勉強に、スポーツに、恋に、たくさんのことができることに感謝したいと思います。それでも、やはりいくつかの不安は残ります。単位を落として留年してしまったりしないだろうか。これが僕の一番の不安です。だから、この危機感を持ってこれからの学生生活を充実したものにしていこうと思います。そして、僕の小学生のときからの夢である医者に向かって、一歩一歩進んでいこうと思います。

きっと、みんなも僕と同じ様なことに不安になったり、期待したりしていると思います。だからこそ、みんなで支えあったり、良い意味で影響し合ったり、ときには競争し合いたいと思います。

僕はこれから、まだ話し掛けたことのない、これからの仲間達に話し掛けていこうと思います。大学生は積極性が大事、僕はこう思っています。これは勉強だけでなく今言ったような友達をつくるときにも、どんなときにも言えると思います。僕もどんどん話し掛けるので、みんなも是非話し掛けてきてください。それではお互いがんばりましょう。

「旭川医科大学に入学して」

医学科第１学年　高　橋　健　太

旭川医科大学に入学して、もうすぐ１ヶ月が経つ。少しずつではあるが、大学生活にも慣れてきた感じがする。自分はこの大学に入学するまでの２年間浪人していたので、２年ぶりの学生生活はとても新鮮なものである。入学するまでは、今まで生活してきた横浜から知りあいが１人もいないこの旭川にやってきて、うまく人付きあいしていけるか、とても不安だった。今となっては、くだらない心配をしていたなと思ってしまうのだが、その時はとても不安だった。

入学式の朝、学校の門を通りすぎると、そこは部活の勧誘をしている人達で一杯だった。自分は前からサッカー部に入ろうかと思っていたので、サッカー部以外の部活の人達の前は何事もなかったかのように通りすぎてしまった。そして、サッカー部の人達の近くにきた時一目みて「ノリがサッカー部っぽいな」と思い、ただそれだけの理由で入部しようと決めてしまった。その後、校舎内の新入生待ち合い室に入り入学式の開始を待った。根っからの人見知りである自分は、結局その場で人と話すことができなかった。そして、入学式が普通に行われてガイダンスも終わり帰るときになって初めて、学生玄関の掲示板の前で同じ１年生と話すことができた。話した内容はあまり憶えていないが、とりあえず人と話すことができてうれしいと思う気持で一杯だった。

次の日から、１泊２日の新入生歓迎合宿があり、そこでもたくさんの友人をつくることができ、入学後たった３日で、初めに感じた不安感を消し去ることができた気がする。

この先、医師になるための勉強を６年間していくうえでいろいろな壁にぶちあたることもあると思うが、たくさんの友人や先輩方と協力しあって、その壁を乗り越えて、医師になるための道を１歩１歩着実に進んでいきたい。

旭川医科大学に入学して

看護学科第１学年　阿　部　明日美

つらく長い受験勉強を終えて無事合格し、この旭川医科大学での大学生活を思い描きながら迎えた入学式。期待に胸を膨らませ、学校の校門をくぐった瞬間、大勢の先輩に取り囲まれ部活の勧誘をされました。その雰囲気に圧倒されつつも、緊張と不安でいっぱいだった私にとってはその歓迎がとてもうれしかったのを昨日のことのように思い出すことができます。それからはもうただただ驚きの連続でした。まず驚いたのは次の日の新入生歓迎合宿の異様な盛り上がりととてつもない激しさです。でも本当に楽しくて我を忘れてはしゃぎ、大学生になった喜びを心からかみしめました。大学はなんだか楽しいことが多すぎて、このままだと遊びほうけてしまうのではないかととても心配です。しかしそんなことばかりは言っていられません。入学してすぐ、大学での連絡は全て掲示板の上で行われると言われました。高校のときは何もしなくても先生がＳＨＲのときに必要なことを連絡してくれていましたが、今度は自分で足を運び、自分の目で見なければならないのです。

私にとって今までと一番異なる点、そして一番の課題は「じりつ」という点かもしれません。自分の力で物事を行うという意味での「自立」はもちろん、自分で自分をコントロールする「自律」の両方が、大学生活をより有意義で充実したものにするために必要だと思います。やらなければならないことはしっかりやって、人との出会いを大切にし、大学生活を楽しみながら講義で習うだけではないさまざまな知識や経験を積極的に吸収していきたいです。特に私がこの大学に入りたいと思った理由に、この大学の「自発的な探求」の姿勢があるので、そのことをいつも心に留め、常に自ら学ぶ意欲を持ち、色々な意味で幅広い人間になって、卒業したときには胸を張って旭川医科大学出身だと言えたらいいなと思います。

旭川医科大学に入学して

看護学科第１学年　石　塚　直　子

私がこの旭川医科大学に入りたいと思ったのは、高校二年生の時だったと思います。それまで、大学といっても具体的な事は考えた事もなく、まだ自分の将来について、あまり感心はありませんでした。ですから、旭川医科大学を志望校と決めた時、自分の将来についても、よく考えるようになりました。

そして時はあっという間に過ぎ、志望校である旭川医科大学に合格できた時は、すごく嬉しかったです。また、それと同時に、やっと勉強から開放されるという、安心感もありました。

しかし、この考えは入学早々、見事に打ち砕かれました。シラバス等に詳しく目を通せば通すほど、勉強の本番は大学受験ではなく、大学に入ってからの、これからなのではないかと、ひしひしと感じたのです。大学に対して、自分の考えがどれほど甘かったのか。それが大変よく判りました。

また、旭川医科大学はその名の通り、医療に携わる人達を育てる大学です。人の命に関わる仕事なので、学ぶことをおこたる事は絶対許されません。そして、私が目指している、看護師などは患者と接する機会が多く、コミュニケーションをうまくとっていく方法も必要です。その為、高校よりももっと学ぶ事への関心・向上心を持つ事が、大学で学んでいく事で大切であると思います。学ぶ事の他にも、自分の適切な判断力や責任感を、自分の中で育てていく事も必要です。

これらの事を全て身に付けていき、豊かな人間性と幅広い視野を持つ事によって、社会に貢献し、病気の予防、治療に最善を尽くす事ができる、本当の意味での優れた医師及び看護職者になる事ができると私は思います。私も、そういう看護職者になりたいです。そのため、大学では高校以上に積極的に学んでいきたいと思います。自分の能力を信じて、一生懸命この旭川医科大学で頑張っていきたいです。

オーストリア及びスイス視察旅行を終えて

ドイツ語　助教授　田　中　　剛

この度、私たちＢ班の神成（看護学科）、苫米地（看護学科）、中村（図書課）、田中（一般教育ドイツ語）は、３月15日より22日までの日程でオーストリアとスイス両国の医療施設見学の機会を得ることができました。訪問先は、ウィーン市の東に位置する「東ドナウ社会医療センター」、チューリヒ州チューリヒ大学病院付属看護学研究所、そして西隣のアールガウ州バーデン市のバーデン・デットヴィル州立病院付属高等看護学校でした。

昨今、社会医療関連の制度の拡充や質的向上が多くの議論の中で取り上げられ、介護･看護、そして医学連携の充実が焦眉の急となっているわが国の現状と、オーストリア／スイスにおけるそれとを比較できるような視点を見いだすこと、これが今回の訪問の主眼でした。それ故、重点は医学分野そのものというより、むしろそれを下支えしつつさらに学としての自立性も求められる看護学の医療全体における役割、その教育現場の実体、施設の充実度、さらには高齢化社会の現実を踏まえた老人介護実践の基本理念がどんなものか、またどのようにそれが具現されているかについての見聞を得ることでした。

17日に訪問した「東ドナウ社会医療センター」はオーストリア屈指の規模と設備、またすぐれたスタッフを有する近代的総合医療施設で、最大病床数933床、年間入院患者数５万人、年間外来患者数15万人、介護・療養ホームと付属デイケアセンターと付属保健衛生看護学校、小児専門医療施設も兼ね備えており、付属研究所（病理学・細菌学・放射線腫瘍学・放射線診断学・労働医学・口顎顔外科・歯科医学）もあり、これらが有機的に機能するように敷地内に配置されていました。看護学生のための寮、職員住宅もすべて完備していました。システム管理は、食事・薬・洗濯物・ゴミ等の運搬のための60台のロボットによる無人化にとどまらず、職員のスケジュール作成・調整にも及んでいました。このような徹底した合理化により節約された運営費が社会医療設備へも有効に使われるとのことでした。私たちは介護・療養ホーム、看護学校の内部・授業風景も見学させてもらいました。特に前者では、老人を施設内に閉じこめるのではなく、積極的に外部のコミュニティと接触させ、それまでの人生の自分なりの流儀で、可能な限り自力での快復を促すという姿勢が貫かれ、そこに学ぶべきものが大いにあると感じました。アメニティーとノーマライゼーションが鍵でした。また、看護学校のカリキュラムは極めて実践的でよく精査されたものでした。

19日にはチューリヒ大学病院付属看護学研究所を訪ねました。所長の Frau DDr. ケッペリのもとで10数名のスタッフが看護学理論の研究と実践を進行中でした。案内の前に詳しくスイスにおける看護学の過去と現状、大学病院における研究所の意義等について説明を受けました。看護学専門誌の編集主幹を長年続けておられるケッペリ女史のお言葉はたいへん説得力のあるものでした。多くの学術的資料を渡して下さり、今後の交流を楽しみにしておられる様子が窺えました。また、病棟内では看護の現場を肌で実感させて下さいました。研究課題をこれらの現場から見いだし、成果を現場に再び戻し、フィードバックの過程からまた新たなテーマに取り組むといった理論の実践化が女史の信念であると感じました。

翌日20日、硫黄泉で2000年の歴史のある町バーデンの郊外にあるデットヴィル州立病院付属高等看護学校を訪問しました。ここは隣接する病院と連携して、看護助手・看護士（ＮⅠ/ＮⅡ）養成のための学校でした。環境に恵まれ、寮も完備し、また教職員もたいへん気さくで好感がもてました。看護職をめざす若い学生のために細やかな全人教育を重点にしているのが特に印象に残りました。毎年夏に実施されるイタリアへ研修旅行は、まさに体験的PBLの一つだとのことでした。もし日本とスイスの未来ある看護職をめざす学生たちがこのような形において相互に交流できる日がやがて来れば素晴らしいだろうと夢見た次第です。

古代と近代の癒しの場所を訪れて

海外視察報告：松岡　悦子、藤井　昇造、柏　　静子
(社会学 助教授、 庶務課 専門員、 10階西 看護師長)

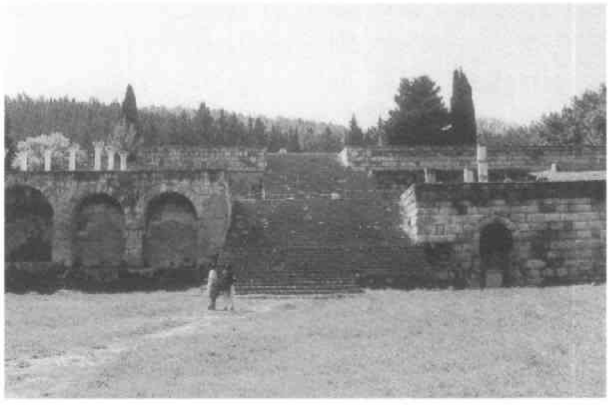
私たち（松岡悦子、藤井昇造、柏　静子）は、3月23日から30日の予定で、ギリシャのコス島とアテネを訪れた。コス島は医学の祖ヒポクラテスの生まれた島であり、かつ治癒神アスクレピオスの神殿跡のある場所で、いわば古代の癒しの場である。それに対してアテネは、アテネ大学医学部と付属病院という現代の癒しの場であった。

コス島はギリシャの東の端、トルコのすぐ目と鼻の先にある小さな島で、ヒポクラテスのプラタナスやアスクレピオンがある。アスクレピオンとは、アポロンの息子アスクレピオス神にちなんで建てられた古代の治療の場で、アスクレピオスの死後、彼の流れを汲む教団が各地に建て、そこで病人の治療を行っていた。病人たちがアスクレピオンで寝泊まりすると、夢の中にアスクレピオス神が現れて病気を治す。その時にアスクレピオスはいつもヘビを連れている。これが現代の医師にまで受け継がれるヘビのシンボルの由来である。

ギリシャのバス代はとても安く、コス島のような田舎ではバスの運転手に行き先を言うとそこまで行ってくれるし、帰りには時間を言うと迎えに来てくれる。さて、アスクレピオンはどんなところだろうかと想像しつつ、バスを降りて木立の中を歩いていくと、目の前にぱっと広大な景色が広がった。丘の斜面全体がアスクレピオンなのだ。丘の上は糸杉の緑の林が取り囲み、中央を石段がずっと上まで貫いている。その両側に石造りの古代の入浴場、病人の宿泊施設、神々の神殿などが残っている。中央の階段をゆっくり上って振り向くと、なんと向こうに真っ青なエーゲ海とトルコの半島や他の島々が見える。3人で「わーっ、スゴイ、この景色、これなら病気が治るわね」と納得。「こんな所に何日もいたら、病気治りますよ」と柏師長さんが言うぐらいだ、たしかに景色は人を癒すのだろう。このすばらしい景色の中で、古代の人々は入浴したり、語らったり、神に祈ったりし、やがてアスクレピオス神が夢に現れて癒しの手を差し伸べてくれることを期待したのだろう。本によれば、アスクレピオスはさまざまな薬草を用いて治療したようだが、人間の治癒力を発揮させるうえで、すばらしい眺めと自然環境も大きな効果をもたらしたのだろう。

さて28日には、アテネ大学と付属病院を、昨年医学部を卒業したばかりのDr. Mathilde Costeに案内してもらった。彼女によれば、医学部の生徒数は入学時と卒業時で大きく変わり、入学時には250人ぐらいだったのが、卒業時には800人ぐらいに増えているという。それはアテネ大学にパスしなかった学生がいったん東ヨーロッパの大学の医学部に入り、そこで一部単位を取ってからアテネ大学に編入してくるからだそうだ。ギリシャで得た医師免許はEUの国々で通用するということだ。学生はすでにEU内の大学を自分の能力や都合に合わせて移動しているとすれば、大学どうしの競争が生じてその中での序列化も生じているのだろう。日本はどうかと考えると、アジアでの大学間の競争はまだ聞いていないし、学生の大移動も聞かないが、日本の大学はその競争に入れてもらえるのだろうか。彼女の母国フランスでは、本当に医師業が好きな人しか医学部を志さないようになってきたが、ギリシャではまだ成績が良いという理由で医学部を目指す学生が多いという。ギリシャの人口当たりの医師数は非常に多く、アテネで医師として生活することは至難の業になりつつあるにもかかわらず、コス島のような島々は医師不足なのだそうだ。

古代文明の栄えたギリシャは、現代ではヨーロッパの第三世界のような状況だ。その証拠に(？)アテネの町中の遺跡は、犬や猫の絶好の住まいになっている。でも彼らのつやつやした毛並みと堂々とした生活ぶりをみると、これこそがギリシャの余裕だという気がしてくる。アテネオリンピックまでに彼らを一掃するなんてケチなこと言わないでほしいね、と3人で話したのだった。



海外視察報告

薬剤部　試験研究室長　笠　原　直　邦

海外の医療等を視察し、現在の日本の医療、旭川医大病院のこれからのあるべき姿を創造する為、平成15年２月25日から３月４日まで、ドイツとオランダを訪問した。私達のグループは、久保田芳江（４階西病棟看護師長）・寺澤睦（会計課総務係長）と私、笠原の３名であった。訪問する希望先がKaiserswerther Diakonie と Bayer 本社工場、及び日本に縁のあるオランダの大学であったことより、訪問地はドイツ・デュッセルドルフとオランダ・アムステルダムに決定した。現地で訪問先との折衝等のお世話を頂いたのは、昨年９月第三内科で内視鏡の勉強を１ヶ月程していたドイツ人医師 Silke Mosebach さんであった。彼女とは休日に十勝岳を一緒に歩いた縁で、今回、大変お世話になった。

私たちは、太陽を追いかけてドイツ・フランクフルトに入った。旭川より緯度は高いが、街中に雪は無く、日中は暖かく感じられた。初日は夕方の到着と言うこともあり、フランクフルト名物の『アップルワイン』で視察旅行の無事を願うことにした。

最初の視察先 Kaiserswerther Diakonie について報告したいと思う。ここは別名 Florence Nightigale Krankenhaus と言い名前からもお判かりの通り、ナイチンゲールに縁のある病院である。彼女が12週間、看護婦になる為の基礎訓練を受けたところであり、彼女の将来の方向性を決定づけたという、重要なところでもある。緑の多い広い敷地に、施設が点在していた。案内は、Mr. Weigand といい、14代目にして初めての男性看護部長（Nursing Director）であるとのことだった。病院を案内される前に、私達は会議室に通され、この病院の概要などについて話を伺った。病院のモットーを伺ったところ、「In Guten hand」（パンフレットの表題になっている）という言葉が返ってきた。短い言葉であるが、色々な意味を含んでおり、是非皆さんに考えて頂きたいと思う。旭川医大病院とほぼ同じ規模の病院であったが、ナースコールは、フロアーごとにあるのではなく、一人のスタッフが受け、そこから適宜指令を出すというシステムであった。また、この病院には薬剤師が配置されておらず、処方薬などの調剤は各病院でするのではなく、ジュセルドルフにある同じ Diakonie の病院にある薬局で調剤され、あるいは注射薬は混合されて搬送されてくるとのことであった。病院では非常に陽気な女性達と出会ったが、緑色のナース服はボランテアを意味し、患者さんの相談相手になったり新聞を届たりなど、身の回りのお世話をするということである。病室にも案内して頂いたが、一人当りの面積は当院の新病棟より更に広かった。

ナイチンゲール記念館には、彼女にまつわる資料が収められている。説明を聞きながら、その当時のようすを想像することができた。看護婦の職業が、修道女に由来していることが良く示されていた。

企業の視察には、『アスピリン』で有名なバイエル社を見学してきた。日本では薬品会社であるが本社は総合化学企業であり、石油化学の繊維・プラスチックを原料に広い分野の製品に関っている。医薬品としては、アスピリンの他に Ca 拮抗剤、抗生物質、抗真菌剤、α-グルコシダーゼ阻害剤などが有名であるが、企業全体から見るとほんの一分野であった。企業におけるバリデーションを見ることはできなかったが、巨大企業の一端を垣間見ることができ、視察の目的の一つを果たすことができた。

オランダの大学が休みということで、雰囲気を見るにすぎなかったのが残念であった。ただ、歴史的には日本との係りが強く、博物館には日本とアジアの品々が数多く見られ、ヨーロッパとのパイプ役が感じられた。

最後に、海外視察の機会を与えてくださった久保良彦学長はじめ関係各位に厚くお礼を申し上げ、報告と致します。

講義に対する授業評価の公表にあたって

授業評価委員会委員長　山　内　一　也

平成13年度後期より大別して次の２つの内容で「学生による授業評価」が始まりました。

科目評価：統合科目、実習、演習に対しておこなうもので、主に授業構成を評価する。

講義評価：従来の授業評価と教官評価を総合的に併せたもので、主に授業担当教官を評価する。

「科目評価」については、コーディネーター（授業責任者）にフィードバックし、担当教官間の意見を取りまとめて、コーディネーターが自己評価を行いこの自己評価と学生評価をあわせて「かぐらおか」に公表することとなり、平成13年度後期分から公表を実施してきました。

このたび、「講義評価」についても平成14年度分から「かぐらおか」に以下の内容で公表することとなりました。

1　評価点の高い教官の上位約20％の氏名、所属等を公表する。

2　更に、上位３名の教官については、評価表と教官のコメントを併せて公表する。

現状では点数化された「講義評価」について、少なくとも以下のような問題点が指摘されています。

1　選択科目、必修科目を区別していない：評価した学生の講義に対する意識に大きな差があると推測され、母集団が異質である。

2　評価した学生数（回収数）にばらつきがある：少数の場合、その講義に対する意識の高い母集団が形成された可能性がある。

これらは今後の評価にあたり改善すべき点と考えています。

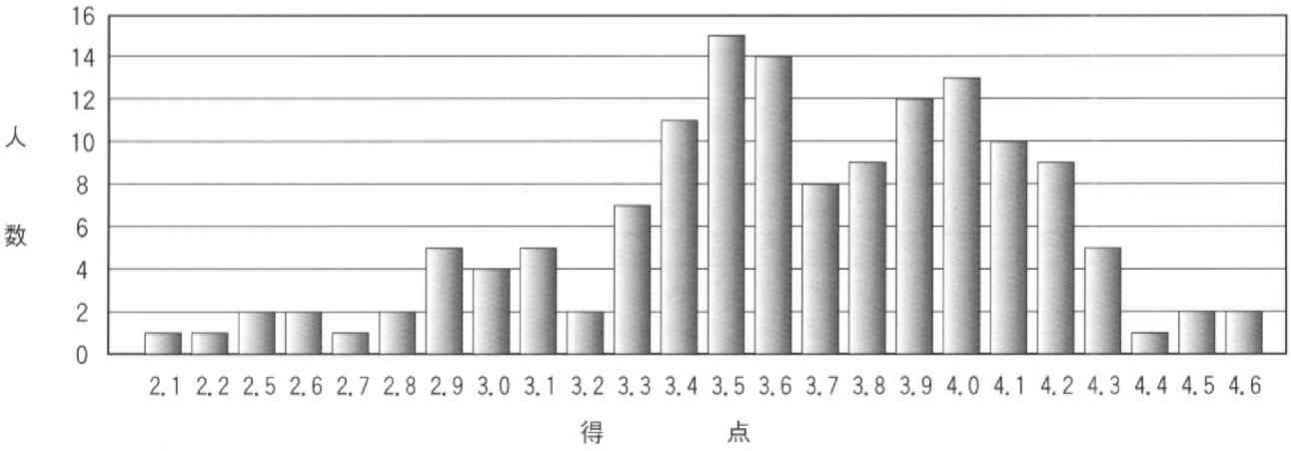
今回、点数化された評価結果がこれらの問題点を内包するにもかかわらず、あえて公表に、踏み切ったのは、個々の教官が学生からの評価を真摯に受け止め、少しでも授業の改善に役立てていただきたいという評価委員会の思いからであります。従って、今回、順位形式での公表を試みておりますが、単年度の点数自体に過大な価値を置くべきでないことは明らかです。

複数年の評価を通じて、全ての教官の評価が「右肩上がり」となることこそ評価委員会の希望であることをご理解いただき、本公表結果については、読者個々の良心に従ったお取り扱いをお願い致します。

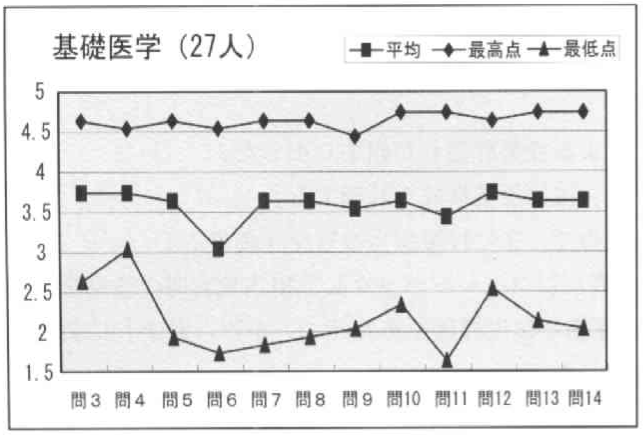
平成14年度「講義に対する学生評価」における全教官の得点分布

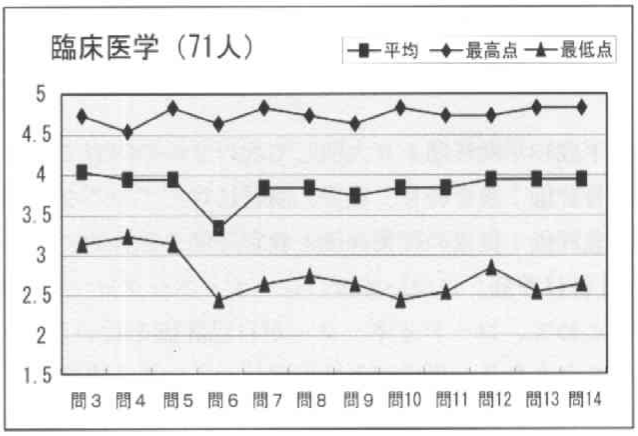
	得																	点						
	2.1	2.2	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6
人数	1	1	2	2	1	2	5	4	5	2	7	11	15	14	8	9	12	13	10	9	5	1	2	2

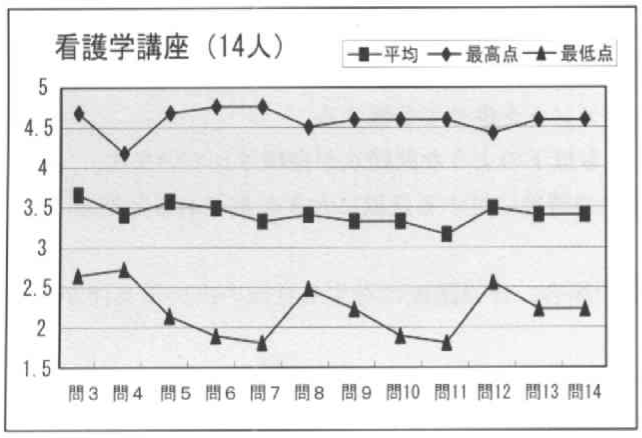
（合計 143名　平均値 3.6）

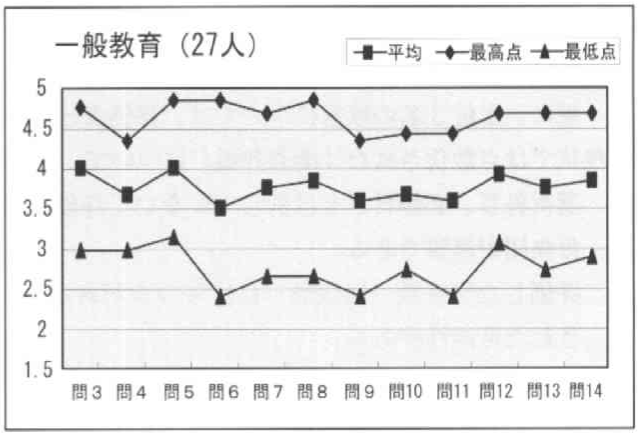


問３～14の各平均点と最高・最低点









講義に対する学生評価

あなた自身について	問１　講義を受ける前に、履修要項を読む等予習をしましたか。 問２　この授業中に、授業内容を理解するための努力をしましたか。
講　義　計　画	問３　講義はよく準備がなされていましたか。 問４　履修要項に沿った講義でしたか。
教　育　意　欲	問５　教育に対する熱意が感じられましたか。
教　育　態　度	問６　教官は授業の中で、学生の参加（質問・発言等）を促しましたか。
講　義　技　術	問７　明瞭で聞き取りやすい話し方でしたか。 問８　教材（プリント、スライド、板書等）は適切でしたか。 問９　今後の学習の意欲を増す内容でしたか。 問10　教官は講義において重要なところを強調してくれましたか。 問11　授業は理解しやすかったですか。 問12　知識が豊富で論理力に優れていましたか。
総　合　評　価	問13　講義に出席した価値がありましたか。 問14　この講義に対する総合評価をしてください。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

高得点者 TOP3

1

非常勤講師　中西　信行
科目名：日本語購読　（医学科・看護学科前期／選択科目）
日　時：平成14年９月６日(金) ２講目
履修者数：１２　　配布数：１０　　回収数：１０　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	平均
4.8	3.7	4.9	4.9	4.7	4.9	4.3	4.4	4.4	4.7	4.7	4.7	4.6

＊評価に対するコメント

履修者が12名であると、全員の考えを聞いたり、机間指導も効果的に行えるという利点がある。講義では、日本語の魅力を生かす表現の工夫、より適切な言葉や表現を考えさせるペアによる学習など、学生同士で表現を工夫・発表という学生参加型の指導を工夫した。個人の作文の添削も、少人数のため、具体的かつ適切に指導できた。時間の流れと資料を一体化したプリントを用意して、書く時間の確保に努めたが、論理的な文章を書く能力を育成するだけの余裕がなかった。

2

看護学科　松浦　和代
科目名：看護過程論　（看護学科第２学年通年／必修科目）
日　時：平成14年10月８日(火) ６講目
履修者数：６２　　配布数：６０　　回収数：６０　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	平均
4.7	3.9	4.7	4.7	4.8	4.5	4.6	4.6	4.6	4.4	4.6	4.6	4.6

＊評価に対するコメント

看護過程論は、問題解決法を看護実践に活かし成果をあげるための方略を学ぶ教科目です。今回の評価では（自由記述欄に）、体験型小演習を取り入れたこと、小演習後の討議が活発であったこと、などが学習意欲を高めたというご意見を多くいただきました。今後も、こうした講義の構成や双方向的な展開を努力していきたいと考えています。

皆さんは、３年生・４年生の臨地看護学実習においても、対象者や実習場の難易度を高めながら繰り返し看護過程論を学習することになります。講義ノートや臨地看護学実習ガイドラインがさらに有効活用されることを期待しています。

3

眼科学講座　吉田　晃敏
科目名：眼科学　（医学科第４学年後期／必修科目）
日　時：平成15年１月24日(金)　４講目
履修者数：１０６　　配布数：９８　　回収数：８５　　回収率：８６．７％

＊評価結果（平均）

問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	平均
4.6	4.3	4.7	4.0	4.7	4.6	4.5	4.7	4.6	4.6	4.6	4.6	4.5

＊評価に対するコメント

私の98名を対象とした「眼科学」の講義が、学生さんからの評価の結果、ベスト３に入ったとの知らせを聞き、17年間教官を勤めている者として、感無量で、大変嬉しく思っている。

私は、「授業」とは、１人の教官と学生さん達が創る「面」での接触であると思っており、彼らとの対話の中で、私の伝えたいことを彼らの視覚、聴覚に訴え、双方向で展開するよう心がけている。彼らは、かつて私がそうであったように、常に新しい「夢」を求めている。私は、いつもその夢を彼らに与えるため授業に「情熱」を傾け、そこで彼らと共に授業を通して「感動」している。ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学では、ベストティーチャー賞は、インパクトファクターの高い雑誌（Nature、Science など）に論文が accept されたと同じ評価を受ける。すなわち、「教育」も「研究」と同じレベルで評価を受けている。今回の「ベスト３」は、私の今後の学生教育に対する大きな「励み」になる。私の拙い授業を聴き続けてくれている学生さん達のために、今後も謙虚に彼らの評価に耳を傾け、「教育」に力を尽くしたい。そして、「教育」に対する評価が、「研究」や「診療」と同じレベルで行なわれる旭川医科大学であってほしい。

以下　４．１以上（上位20%内）の教官は次のとおりです。（＊五十音順）

所属名	教官名	科目名	
皮膚科学講座	飯塚　一	皮膚科学	必修
看護学科	伊藤幸子	母性看護学	必修
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	今田正信	耳鼻咽喉科学	必修
麻酔・蘇生学講座	岩崎　寛	麻酔学	必修
非常勤講師	江口尚文	経済学	選択
内科学第一講座	川村祐一郎	内科学	必修
内科学第一講座	菊池健次郎	内科学	必修
内科学第三講座	斉藤裕輔	総合臨床医学Ⅲ	必修
英語	サイモン・N・ベイリー	医学英語ＩＢ	必修
法医学講座	塩野　寛	基礎医学実習Ⅴ	必修
非常勤講師	須田康之	教育学	選択
麻酔・蘇生学講座	仙石和文	麻酔学	必修
生理学第二講座	高草木　薫	生理学	必修
保健管理センター	武井　明	心理学Ⅱ	必修
精神医学講座	布村明彦	精神医学	必修
内科学第一講座	長谷部直幸	内科学	必修
生命科学	林　要喜知	人間科学Ⅰ	必修
外科学第一講座	平田　哲	外科学	必修
麻酔・蘇生学講座	藤田　智	麻酔学	必修
整形外科学講座	松野丈夫	整形外科学	必修
外科学第一講座	宮本和俊	外科学	必修
寄生虫学講座	山崎　浩	寄生虫学	必修
解剖学第一講座	吉田成孝	解剖学	必修
看護学科	良村貞子	基礎看護学Ⅰ	必修
解剖学第二講座	渡部　剛	生命科学Ⅶ	必修

3

薬理学講座　原　　明義
科目名：薬理学　（医学科第２学年後期／必修科目）
日　時：平成14年12月12日（木）２講目
履修者数：９８　　配布数：９５　　回収数：９３　　回収率：９７．９％

＊評価結果（平均）

問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13	問14	平均
4.6	4.5	4.6	3.8	4.6	4.6	4.4	4.7	4.7	4.6	4.7	4.7	4.5

＊評価に対するコメント

今回の「講義に対する学生評価」におきまして、概ね満足できる評点をいただきました。講義では、プリントを用いて重要なポイントを理論的に分かりやすく解説することを心がけてきたせいか、積極的かつ集中して講義に参加していた学生が多く、それがまた講義しやすい雰囲気になったように思います。その意味で、学生の前向きな姿勢があっての評点と考えております。問６につきましては、学生に質問したり発言を促す時間が十分に持てませんでしたが、今後はこの点を反省し、講義の改善を図っていきたいと考えております。

日　　時	学　年	履修者数	配付数	回収数	回収率（%）
平成14年11月７日（木）２講目	医　4	101	86	63	73.3
平成14年12月10日（火）３講目	看　3	66	49	49	100.0
平成14年12月10日（火）１講目	医　4	101	85	65	76.5
平成14年11月19日（火）４講目	医　4	101	56	33	58.9
平成15年２月５日（水）３講目		50	46	46	100.0
平成15年１月８日（水）２講目	医　4	106	87	61	70.1
平成15年１月８日（水）３講目	医　4	106	61	36	59.0
平成15年１月24日（金）５講目	医　3	99	86	85	98.8
平成14年10月29日（火）３講目	医　1	24	22	22	100.0
平成14年10月３日（木）５講目	医　4	101	94	89	94.7
平成14年７月10日（水）２講目		35	31	31	100.0
平成14年10月８日（火）４講目	医　4	101	65	63	96.9
平成15年１月31日（金）２講目	医　2	98	68	67	98.5
平成14年11月21日（木）２講目	看　2	65	41	41	100.0
平成14年12月６日（金）３講目	医　4	101	59	50	84.7
平成14年10月16日（水）２講目	医　4	101	84	68	81.0
平成14年９月６日（金）６講目	看　1	70	68	67	98.5
平成14年12月６日（金）５講目	医　4	101	80	66	82.5
平成15年１月21日（火）４講目	医　4	106	98	66	67.3
平成14年11月19日（火）２講目	医　4	101	88	77	87.5
平成15年１月10日（金）５講目	医　4	106	97	64	66.0
平成14年11月27日（水）３講目	医　2	98	81	77	95.1
平成14年11月18日（月）３講目	医　2	98	65	61	93.8
平成14年５月27日（月）５講目	看　1	60	59	59	100.0
平成14年11月21日（木）３講目	医　1	94	72	67	93.1

科目全体の講義企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　あなた自身の出席状況について、お答えください。 問２　あなたは、授業の前後に、授業を理解するための努力（予習・復習等）をしましたか。 問３　あなたは、授業中に、授業の内容を理解するように努めましたか。
科　目　構　成	問４　科目全体の履修の目的は、あらかじめ明確にされましたか。 問５　履修主題間で、内容の重複は避けられていましたか。 問６　各履修主題に割り当てられた授業時間数は適切でしたか。 問７　担当教官は、履修主題に沿って授業を行いましたか。
科　目　内　容	問８　各履修主題の難易度は、ほぼ同じ程度でしたか。 問９　科目全体の内容は、理解しやすいものでしたか。 問10　科目全体の内容は、今後の学習意欲を増すものでしたか。 問11　科目全体の履修の目的は、最終的に達成されましたか。
試　験　内　容	問12　試験、提出物（レポート等）の量と内容は適切でしたか。
総　合　評　価	問13　この科目全体の講義企画に対してのあなたの総合評価を示してください。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：人間科学Ⅱ　（看護学科第１学年後期）
履修者数：６０　配布数：５２　回収数：５１　回収率：９８．１％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	2.5	3.4	3.4	3.6	3.7	3.8	3.3	3.4	3.5	3.4	3.5	3.6

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

人間科学Ⅱコーディネーター　近　藤　　均

この科目は、原則として社会学・歴史学の各専任教官と哲学の非常勤講師が、それぞれ15時間、計45時間（３単位）を担当している。内容は、いわゆるメディカル・ヒューマニティーズ（あえて訳せば医療人間科学）である。昨年度の同じ授業評価と比べると、問１と問３は同じ点数であったが、問９、11、12、13でそれぞれ0.1ポイント増、問５、６、10で0.2ポイント増、問２、４、７で0.3ポイント増というように、わずかながら良い結果が出た。しかし、問８では、逆に0.2ポイント減となった。昨年度より、担当教官によって主題の難易度に差があったようである。確かに、歴史学分野が具体的・実践的なテーマを扱ったのに対し、哲学分野はやや抽象的・観念的話題が多かったようである。学生の声として、「３人の先生それぞれの特徴が出ていて色々な知識を広々と学べてよかった」という肯定的な意見があった反面、「各先生で内容が重なっているところがあって少し残念だった」との意見もあった。今後は教官どうしの意思の疎通をいっそう緊密にしたい。

科目名：看護理論Ⅱ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６６　配布数：５６　回収数：５６　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.3	3.0	4.1	3.9	3.8	3.5	3.8	3.5	2.9	3.0	3.2	3.3	3.3

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

看護理論Ⅱコーディネーター　良　村　貞　子

第１学年で看護理論Ⅰの講義を受け、その後、演習や実習で様々な看護活動を体験学習し、本科目を第３学年で履修する。したがって、学生は具体的な看護場面を想起しながら受講している。看護理論Ⅱでは、主要概念である「人間」「健康」「環境」看護」を各看護理論家がどのようにとらえているか、それは何故か、また、具体的な看護活動を取り上げ、各理論に基づきどのように分析することができるかを学習する。なお、看護師の国家資格を有する編入学生も本科目を履修するため、基礎的内容の理解に加え、応用的展開も期待されている。

本科目において、学生自身も授業を理解する努力の評価は3.0であったが、科目全体の内容は理解しやすいものでなかったとの評価を謙虚に受け止めたい。今後は、より具体的な説明に努め、看護実践場面の理解が深まるような内容としたい。

科目名：生命科学Ⅳ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９４　配布数：９４　回収数：９２　回収率：９７．９％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	3.3	3.9	4.2	4.0	3.9	4.1	3.6	3.5	3.8	3.9	3.8	3.9

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

生命科学コーディネーター　中　村　正　雄

昨年懸案となった問２、６、８、９の評価がいずれも改善されたこと、また他の問いも評価が上がったことから講義全体への新しい取り組みが功を奏したと考えている。生命科学Ⅳは生命科学Ⅷと合わせて生化学を網羅する構成となっており、生化学を担当する先生方とたえず講義内容の整備を行っている。生命科学Ⅳの具体的内容は“準備教育モデル・コア・カリキュラム”を踏まえ生命を構成する分子の成り立ちと性質、生体熱力学、酵素、フリーラジカルと多岐に及んでいる。いずれもキーワードを覚えるよりは概念を理解することが重要である。平成14年度は講義のコマ数が30から45に増えたことで、より丁寧な講義ができこれが学生の理解の助けになったものと思う。

科目名：看護過程論　（看護学科第２学年後期）
履修者数：６２　　配布数：６２　　回収数：６２　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.6	3.4	4.6	4.0	3.4	3.1	3.7	3.7	3.6	4.0	3.9	3.7	3.9

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

看護過程論コーディネーター　良　村　貞　子

看護過程論は、看護学において基礎となる重要な科目である。昨年はこの科目が前期で終了したため、12月の看護過程論実習とうまく連動しなかったとの反省から、今年度は実習前後に科目を展開した。その結果、総合評価で3.9を得ることができ、「実習直前に学習するのは実習に役立ちよいと思った」という意見にみられるように、学習効果を高めたと思われる。ただ、数人の学生から、実習まで少し時間的余裕がほしいとの意見もあり、どのような展開方法がよいか今後も検討する必要がある。

また、学生自身の評価において、授業の前後に予習復習をあまり行なわなかったと回答した者が１割以上いたため、学生の努力を喚起するような働きかけが必要である。さらに、「難しいと思うが、学生一人ひとりへの助言を希望する」「複数の事例に看護過程を展開してみたかった」等の希望もあったため、時間的制約はあるが、より一層、内容の充実を図りたい。

科目名：健康教育論　（看護学科第１学年後期）
履修者数：６９　　配布数：６９　　回収数：６９　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.4	3.0	3.8	4.0	3.5	3.8	4.3	4.2	4.1	3.9	4.0	4.1	4.1

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

健康教育論コーディネーター　望　月　吉　勝

ピア・レクチャーやグループで教材づくりに取り組むなど、参加型授業を目指したことを学生が感じ取り、理解してくれて、良い評点となったものと思います。

この科目内容を学部１年生が学習するための教科書探しに苦労しましたが、幸い今年度新刊されたわかりやすい本を用いることが出来ました。これらの教科書については、わかりやすくて自己学習に役立ったと何人もが自由記載欄に書いてくれました。大学で学ぶ場合、授業外の自己学習で理解を深めることが不可欠なのは周知の通りですが、そうした自己学習に役立つ教科書選びの大切さを痛感しました。

グループ発表会が病棟実習の時期にあって大変だったと、何人もが書いていました。初めての病棟実習で緊張していたものと思います。でも、この科目の総まとめとして、致し方ないと思います。そこで、開講時からこの課題を説明し、12月に中間発表会、冬休みを挟んで本発表会と、段階的に出来るように、また日程に余裕があるように配慮したつもりです。

科目名：総臨床医学Ⅱ　（医学科第３学年後期）
履修者数：９９　配布数：９９　回収数：９４　回収率：９４．９％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	3.4	4.0	3.7	3.2	3.2	3.6	3.0	3.2	3.4	3.4	2.7	3.2

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

総合臨床医学Ⅱコーディネーター　笹　嶋　唯　博

第二回目の授業に対する学生評価を前回と比較してみると13質問項目の回答は平均して13年度とほぼ同じ傾向を示した。即ち学生は授業にあたりある程度の準備をしている、一方講義内容の理解は充分とは云えないという結果である。しかしこれは講義内容や方法改善の必要性を示唆する結果とは即断できない。講義一単位とは、予習の一時間、講義の一時間及び受講後の学習一時間より構成されている。講義内容への理解度が高値を示すとすれば膨大な医学知識を身につけなければならない。医学部学生にとってそのような講義が妥当なものといえるか否か、大変疑問である。これまでの評価結果が最終的に医学生の知識を大成させる上で効果的でないとする明確な根拠が示されるならば講義の改善等が求められるところであるが、現状では中間よりもやや良い方に位置しており、許容しうる結果と判断される。

科目名：生命科学Ⅶ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９４　配布数：９４　回収数：９２　回収率：９７．９％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	3.7	4.1	4.4	4.1	3.9	4.4	3.8	3.9	4.0	4.1	3.6	4.1

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅶコーディネーター　渡　部　　剛

本科目では、人体を構成する諸器官の組織構築を理解することを目的として、人体組織学および病理学序論の講義を行っている。今年度から新しいカリキュラムに移行したが、本科目に関しては前年度までの総合生命科学Ⅳと変わらぬ内容となっている。今回の評価では、どの項目に関してもおおむね４点前後の評点をいただき、前年度（総合生命科学Ⅳ）と比較して、問４-13の項目で平均0.3ポイント程度上昇した。これは、受講学生からのフィードバックを参考にして、各コマの展開時期や内容・時間配分を毎年修正してきたためと自負している。また、今年の学生は昨年度の学生より学習意欲が高く（講義前後の予習・復習の程度の指標である問２の平均値が今年度は3.7（昨年度は2.7）、我々講義をする側にとっても、やりやすかった。

今後も、学ぶ意欲に満ちあふれた学生に対しては、この科目の展開時期以外でも積極的に支援していきたいと考えているので、組織学・病理学の領域で質問・疑問が生じた場合には、気軽に担当教官まで尋ねに来て欲しい。

科目名：疾病論　（看護学科第２学年後期）
履修者数：６２　　配布数：６２　　回収数：６２　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.3	3.1	4.0	3.8	3.2	2.4	3.5	2.5	3.0	3.9	3.3	2.8	3.4

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

疾病論コーディネーター　**木　村　昭　治**

最も指摘の多かった教科書については「疾病論」という教科書はなく、せいぜい内科、外科をまとめて、そう称しているものが多い。従って拡くカバーするとなると、各看護領域の総論における疾病についての記述に頼ることになる。本年度は各領域にまたがっているものを、ある程度まとめる意味で教科書を指定したが、あまり有効ではなかった様である。各領域の教科書を２年生でそろえてもらうのが適当かと考えている。

科目名：対人関係論Ⅲ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：５６　　配布数：５５　　回収数：５５　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	2.9	4.1	3.2	3.4	3.4	3.8	3.6	3.4	3.3	3.3	3.4	3.6

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

対人関係論Ⅲコーディネーター　**新　開　淑　子**

対人関係論Ⅲは、対人関係論Ⅰ・Ⅱでの基本的コミュニケーション技法を始めとした対人関係の基礎を修得した上に積み重ねられるべきものである。従ってここでは“自己を知ること”“自己への気づきを増すこと”をねらいとした。困難な対人関係の問題解決にあたって、相手を変えることは難しい。自分の感情・思考・行動を変えることが必要となる。そのためにも自己を知り、自己への気づきを増すことの意味がある。しかし困難な対人関係場面に遭遇し、悩んだ経験のない学生にとって自己活用まで求めることは少々難しかったのかもしれない。もっと困難な対人関係場面設定を具体的に提示し、ロールプレイングを通して困難な場の状況を共有し、解決策を考えられるような講義内容を再考していきたいと考える。

科目名：社会医学基礎Ⅱ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９４　配布数：９４　回収数：９２　回収率：９７．９％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.3	3.1	3.8	3.4	3.4	3.5	3.5	3.7	3.5	3.4	3.6	3.5	3.5

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅱコーディネーター　**松　岡　悦　子**

この科目は、患者の権利や自己決定権をテーマに、２人の教員で担当したものである。生命倫理の基本的原理を15コマのうち前半部分で、その応用としてのケーススタディーを後半の授業でとりあげた。前半は講義が中心であり、後半のケーススタディーでは、学生の人たちに、まずグループに分かれて話し合ってもらい、それを後に発表してもらう形をとった。

この学生評価を見ると100人近くの学生の人たちが、授業に参加し、発言できる状況を作るためには、教師の側の工夫がもっと必要なことがわかる。

この学生評価が行われたのがテストの時だったためか、学生はこの科目の試験の内容や事前の説明のしかたについて、改善してほしいとの意見を述べていた。確かに、試験は学生にとっては、その科目の最後を締めくくる重要なイベントである。その意味では、シラバスに始まって試験の結果までの連続したものとして１つの科目のあり方を考えねばならないと思った。

科目名：生命科学Ⅴ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９４　配布数：９４　回収数：９４　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	3.5	4.1	4.1	3.9	3.9	4.1	4.1	4.2	4.3	4.2	3.9	4.2

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅴコーディネーター　**高　橋　雅　治**

生命科学Ⅴの目的は、病める者の心理を思いやり、全人的な医療を実践するために必要な心理学の基礎知識を体系的に修得することである。講義内容は、基礎心理学・臨床心理学・発達心理学の３分野であり、コーディネーター自身が全講義を担当した。

問４から問12の評価結果は3.9から4.3と良好であり、総合評価も4.2とかなり高かった。また、コメント欄では、「とてもおもしろかった」、「分かりやすかった」、「興味を持てた」というような意見が数多く見られた。

このような評価が得られた理由としては、講義内容のレジメを毎回配布したこと、全てのレジメを綴じると心理学の入門書となるように全体を構成したこと、理解を深めるための図表や動画を適宜提示したこと等が考えられる。一方、問２の評価から、受講者の多くは予習や復習を行っていないことが示唆された。従って、今後は、自宅学習を促進するための工夫に取り組みたいと考えている。

科目名：総合臨床医学Ⅲ　（医学科第３学年後期）
履修者数：９９　配布数：９９　回収数：９６　回収率：９７．０％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.3	3.5	4.0	3.7	3.5	3.5	3.9	3.4	3.6	3.8	3.7	3.6	3.8

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

総合臨床医学Ⅲコーディネーター　葛　西　眞　一

総合臨床医学Ⅲは内科外科合わせた消化器病と貧血が主なテーマである。その学生評価で最も高い評点だったのは「学生自身の出席状況」であった。これは教官としても実感したことである。中には遅れて入室する学生もいるが、ほとんどは積極的に真剣に講義を受けていた。チュートリアルと連動していることが意欲を駆り立てた原因かもしれない。一方最も低い評点は「各履修主題の難易度がほぼ同じ程度か」に対してであり、教官の教え方あるいは疾患のとっつきやすさにばらつきがあったことがうかがえる。総合評価も含め、ほかの科目構成や科目内容についてはいずれも3.5から4.0の評点であり、まずまずといえる。試験結果もおおむね良好であったことがこれを裏付ける。具体的な意見を記載してくれた学生は少数であるが、各教官のプリントが役立ったとか講義が分かりやすかったというものが多かった。

科目名：生命科学Ⅵ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９４　配布数：９４　回収数：９４　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.4	3.7	3.9	3.4	3.0	3.2	3.4	3.2	3.1	3.7	3.6	3.4	3.5

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅵコーディネーター　羽　田　　明

生命科学Ⅵという授業科目には、主に、発生学と人類遺伝学の内容が含まれている。それぞれの基本的な知識を教えるとともに、臨床との関連を学習させる必要がある。特に人類遺伝学に関しては、臨床医学では必須の知識になっているにもかかわらず、本学のカリキュラムでは本授業科目のみである。高校で生物を履修していない学生が多数を占めること、高校生物にはヒトの遺伝に関する内容が乏しいこと、疾患を学習していない段階で、発症メカニズムを教えなければならないこと、などの理由で１年生の時点で履修すること自体に無理がある。今年度は人類遺伝部分を、前年度の履修時間が少なく、高度な内容から始めなければならなかった反省から、大幅に増やした。内容自体は他大学と比べても、かなり充実したものであり、学生も評価したと判断している。しかし、途中で日程が変わり、それを学生に伝える段階で不手際があったことは大きな反省点である。学生の意見にもあるように、少なくとも臨床に絡む部分は、４年生以降に枠を設けるべきである。

科目名：総合臨床医学Ⅰ　（医学科第３学年後期）
履修者数：９９　配布数：９９　回収数：９２　回収率：９２．９％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.4	3.6	4.1	3.7	3.8	3.2	3.6	3.1	3.3	3.6	3.6	2.9	3.5

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

総合臨床医学Ⅰコーディネーター　藤　枝　憲　二

総合臨床医学Ⅰは、生殖・発達、免疫機能と感染防御、腫瘍化した白血球、抗生物質、泌尿器系と幅広い分野が含まれる。講義の時間が細切れである、各時間が短いという評価が多かった反面、各科のつながりが理解できたという意見もあったことから、このような総合講義を成功させるためには各自の勉強に対する意欲が不可欠である。

また、試験範囲が講義と異なっていた、日程変更に対しての疑問も多かった。試験範囲は担当した教官とより連携を保つようにするが、講義プリントに書かれてあるのは教えたいことの一部にすぎない。教えた範囲を忠実に覚えるという勉強ではなく、講義は医学に対する関心を広げるきっかけと考えて欲しい。まして、学生の意見が分かれているにもかかわらず、学生の総意であるかのような試験日程変更の要求は今後止めてもらいたい。

演習企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　演習用の配付資料を読む等も含め、演習前の予習は十分でしたか。 問２　演習に積極的に参加したと思いますか。 問３　演習への取り組みは学習目標へ到達を目指す態度として適切なものでしたか。 問４　履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
演　習　計　画	問５　事前に演習目標と概要の説明がなされていましたか。 問６　演習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。 問７　学生数に対し、指導教官数は適切でしたか。 問８　演習を展開する上で適切な能力を備えた人材が配置されていましたか。 問９　指導教官間の連携は機能していましたか。
演　習　内　容	問10　演習内容はこれまでの講義内容と関連づけて理解しやすいものでしたか。 問11　事前に配布された資料は、実技を行う上で役立つ内容でしたか。 問12　演習によって課題の要点を理解し、基礎的な技術を習得できましたか。 問13　演習内容の難易度は適切でしたか。 問14　演習によって臨地看護学実習に出る意欲がわきましたか。
演　習　環　境	問15　演習用の設備、機材、用具等は必要十分な性能と量でしたか。 問16　演習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問17　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総　合　評　価	問18　この演習は価値のある内容と思われましたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：看護研究　（統計学含む）（看護学科第３学年後期）
履修者数：６６　　配布数：５４　　回収数：５３　　回収率：９８．１％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.7	3.6	3.2	2.8	2.8	2.8	2.3	2.3	1.8	2.2	2.7	2.4	2.2

問14	問15	問16	問17	問18
1.8	3.0	3.1	3.1	2.7

＊評価に対するコメント

看護研究（統計学含む）コーディネーター　望　月　吉　勝

大変厳しい評価でした。特に、教官の授業の進め方や、教官間の連携がとれていないとの指摘がありました。指摘があったことについては謙虚に受け止め、改善していきます。

開講時に説明したように、この科目は研究の一般論と看護学領域での研究とパソコンによるデータ解析演習の３つのパートから構成してあります。同じような事柄を取り上げるにしても観点が違いますし、これらのパートを学んでいけば理解・習得できるように構成したつもりです。もちろん授業時間外にも自己学習が必要ですが、これは大学で学ぶ場合どの科目でも必要なことです。

また、学習の助けになればと「研究スキルのヒント」や「パラとノンパラの使い分け」などのPower Pointファイルを自作して授業に用いるなど、創意工夫を重ねてきたつもりです。ところが、授業中に机に伏して寝ていた学生や、パソコン演習中に授業とは無関係なホームページを開いて遊んでいた学生が何人もいたことを記憶しています。やれば出来る学習内容でも、やらなければ出来ないのは自明の理です。

自由記載に多かったことを踏まえて、来年度は各パートの分担と各々の達成目標をもっと明確に示すことと、レポート提出があまり重ならないように配慮したいと思います。また、教官の声が聞き取れないとの指摘がありましたので、改善したいと思います。

科目名：地域看護学Ⅱ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６６　　配布数：６５　　回収数：６４　　回収率：９８．５％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.0	3.6	3.4	3.2	3.2	3.3	3.1	3.2	3.0	3.0	3.0	3.0	3.2

問14	問15	問16	問17	問18
3.1	3.2	3.3	3.4	3.2

＊評価に対するコメント

地域看護学Ⅱコーディネーター　佐　藤　雅　子

授業「地域看護学Ⅱ」は演習科目というより実際は講義と演習の混合科目です。学生が「演習をした？」「殆ど講義」との感想を書いていましたがその通りであったと思います。本年度は2/3の授業終了時点に「地域看護学Ⅰ実習」が入り、前期授業はこの「学外体験学習」の準備学習、後期授業は体験を深め次年度の地域看護学実習Ⅱや保健師国家試験学習の学習動機づけになるようにと考えた内容としました。本学は看護師・保健師の一貫教育ですので、私は学生たちが地域の中にある実習場で見聞きする現象や参加体験が看護学の体系的学習の何処に位置づくかを「意味づけ、考える」ことが重要と考えています。そのために必要と考えた学習内容の量と担当教官数の関係で本年度は講義時間が多くなりました。しかし本学学生は知識獲得への積極的姿勢や行動力がかなりありますので、今後は学生主体の参加型学習方法への工夫が必要と痛感しています。

科目名：基礎看護技術学Ⅰ　（看護学科第１学年後期）
履修者数：５９　配布数：５８　回収数：５８　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.2	4.1	3.6	4.0	4.1	3.9	3.8	3.6	3.7	3.9	3.8	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.6	4.0	4.1	3.4	4.1

＊評価に対するコメント

基礎看護技術学１コーディネーター　良　村　貞　子

基礎看護技術学Ⅰは、第１学年に行う最初の看護専門科目の演習（90時間）であり、日常生活及び診療に伴う基本的看護技術を学習する科目である。本年度は右片麻痺のある入院患者Ａさんを想定し、どのような援助が必要かを各履修主題にそって考え、それを実施する課題学習を課した。また、総合演習では、学生一人ひとりに異なる具体的な看護場面の課題を与え、その実施内容を他の学生及び教官が評価し、各学生にフィードバックした。

ほとんどの学生が熱心に演習に参加し、積極的な自己学習への取り組みがみられた。このため、４以上の総合評価を得たものと思われる。しかし、「演習時間をもっと長くしてほしい」、「もっと様々な方法で実施してみたかった」、「片麻痺以外の想定も希望する」などの自由記載もあり、限られた時間内でどのように演習を展開するかにはさらなる検討が必要である。また、自己学習しやすい実習室の一層の環境整備も課題である。

科目名：生活援助論Ⅱ　（看護学科第２学年後期）
履修者数：７２　配布数：７２　回収数：７２　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.1	4.0	3.8	3.3	3.6	3.7	3.1	3.4	3.0	3.4	3.4	3.4	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.3	3.5	3.6	3.5	3.5

＊評価に対するコメント

生活援助論Ⅱコーディネーター　北　村　久美子

生活援助論Ⅱは、地域で生活している各ライフサイクルやさまざまな健康状態にある人々を対象にした日常生活援助技術を習得することを目標にしています。

今年度は、昨年行われた学生による授業評価を受けて、改善すべき授業内容、指導方法そして参考になるコメントを授業展開に生かすよう工夫し、努力しました。その結果、今回の授業評価では、問１を除き、全問すべてが前年度を上回っていました。しかし、学生の到達目標を具体的に明らかにしておくことなど改善すべき点は、まだまだあります。

学生の評価は、謙虚に受け止め、今後、さらなる努力をしてゆきたいと思います。

科目名：母性看護学　（看護学科第３学年後期）
履修者数：５６　　配布数：５５　　回収数：５５　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.4	3.7	3.6	3.3	3.8	3.5	3.4	4.0	3.4	4.0	3.9	3.3	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.2	3.5	3.6	3.7	3.8

＊評価に対するコメント

母性看護学コーディネーター　野　村　紀　子

演習の時間は、臨時の特別講義を入れたため少なくなってしまった。
次回からは、特別講義をいれる時期について検討したい。

＊小児看護学の評価に対する感想

Ⅰ．小児看護学：

1)小児の特徴、成長・発達、発達課題、小児の健康と家族・社会といった「健康な小児と家族の理解」から、2)「ストレス・健康問題を有する小児と家族の理解」へと学習を進行し、最後に3)看護の方略とケア技術の統合を意図して展開している。講義展開は、受身の学習に終始しないよう講義と連動するかたちで随時レポート課題を課し、さらに暗記ではなく考える・思考する学習方法を意図し展開している。講義開始時に年間スケジュール・課題内容及び提出内容と時期の周知を図っている。

Ⅱ．評価に関する感想：

①学生自身に関する問いで評価が高かったのは、「授業内容を理解するために努力しましたか」であった。この結果は、受身で講義を聞く学習形態に終始せず、学生自らが課題に向かってとり組む学習方法の導入、積み重ねの結果と評価する。②講義計画に関する評価は、平均ギリギリの低い評価であった。原因として、「ほとんどの学生はシラバスを持参していない」、さらに13年度同様に小児看護学は14年度も92コマ必要でシラバスに記もしたが、何の確認・説明が無いまま75コマしか時間割上確保されず、変更となった理由・修正を教務に求めたが、約15コマ不足な中で展開しなければならなかった。学生には申し訳なかったがこのようなあってはならない無理が影響したと思われる。③教育意欲及び④教育態度、⑤総合評価に関しても、②の講義計画同様の評価であった。２年次までの細かな指示による学習方法との相違による戸惑い・混乱・教員に対する不満の積み重ねが背景にあったように感じている（研究室での会話から）。講義技術に関して、暗記ではなく、学生の統合思考する学習を意図し展開しているが、この学習方法に関しては、昨年の学生と今年の学生間で評価が分かれ、また今年度の学生間でも分かれており、全ての学生にとって良いと過信してはならない教訓を得た。マイクが充電されておらず使用できない日が多く、声が小さく学生に不利益を与えたことは反省点である。OHP は、電気を消すためノートがとれないという支障があり、15年度からは全てパワーポイントに切替る対処を図った。マイク・視聴覚教材等の教具は、この大学ではどこが管理するのでしょうか。学生に明示が必要と思います。

科目名：小児看護学　（看護学科第３学年通年）
履修者数：５６　配布数：５５　回収数：５５　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.1	4.0	3.6	3.2	3.3	3.6	2.9	3.3	3.2	3.1	3.0	3.2	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.3	3.2	3.5	3.5	3.4

＊評価に対するコメント

小児看護学コーディネーター　岡　田　洋　子

Ⅰ．小児看護学における演習：
1)小児の成長・発達、発達課題、2)「ストレス・健康問題を有する小児と家族の理解」、3)看護の方略とケア技術の統合、の単元において、演習を導入している。

Ⅱ．評価に対する感想：
学生自身に関する問いの中で最も高かった評価は、問２「演習に積極的に参加したと思いましたか」であった。この結果は、受身ではなく、学生自ら課題に向かって取り組む学習方法を意図してとり入れている結果と評価する。演習計画に関する問いの中で最も低かった評価は、問７「学生数に対して指導教官は適切でしたか」であった。教授１名・助手１名の計２名での展開は、助手が４学年の実習に出ると教授１名となり、１名欠員(小児看護学担当の講師あるいは助教授)となった教員補充が急務であることを示している。演習内容および演習環境に関する評価は平均的であった。演習課題の準備・動機づけ、演習計画と方法、演習への主体的取り組み等については、妥当な結果と評価する。
小児看護学の演習をさらに充実していくには、他大学なみの最低３名の小児看護学担当教員確保が必要である(現状は短期大学より悪い)。大学院を抱える大学の小児看護学領域を、小児看護学実習Ⅰ・Ⅱを含め教授１名・助手１名の計２名での展開は、教育・演習・実習の質・レベルを問うのであれば、不可能であることは自明のことと認識している。

実習企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　実習用の配付資料を読む等も含め、実習前の予習は十分でしたか。 問２　実習に積極的に参加したと思いますか。 問３　実習への取り組みは学習目標へ到達するための態度として適切なものでしたか。 問４　履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
実　習　計　画	問５　事前に実習目標の説明がなされていましたか。 問６　実習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。 問７　学生数に対し、指導教官数は適切でしたか。 問８　実習を展開する上で適切な能力を備えた人材が配置されていましたか。 問９　指導教官間の連携（実習中の支援等）は機能していましたか。
実　習　内　容	問10　実習全体の内容は関連する講義科目の内容と対応がとれていましたか。 問11　実習内容の難易度は適切でしたか。 問12　準備された説明書・実習書は実習内容を把握するのに役立ちましたか。 問13　今後の学習への興味を増す内容でしたか。
実　習　環　境	問14　実習用の設備、機材、用具などは必要十分な性能と量でしたか。 問15　実習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問16　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総　合　評　価	問17　各項目は実習として行う価値のある内容と思われましたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：生命科学実習Ⅱ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９４　配布数：９３　回収数：９３　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	4.3	4.1	4.1	4.0	4.4	3.8	3.9	3.6	3.7	3.7	4.1	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.8	3.7	3.5	

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅱコーディネーター　谷　本　光　穂

当授業評価は新・新カリキュラム初年度のものである。以前は総合生命科学実習Ⅳの中で展開していたが、その内容は物理学、統計情報処理、脳解剖などの多分野から構成されていた。この実習科目は物理学に関する分野のみとなり、授業時間数も15コマから45コマと大幅に増え、実習内容も課題を全面的に見直し、実習書の改定も行った。課題は、弾性体、光学、流体、電磁気、放射線と幅広い分野から構成され、自然科学的な考察力を養うことを目的としている。実習書は、昨年のアンケートの「事前学習のため実習書の事前配布を希望」という要望に応えた。また、「授業評価」は、Ａ、Ｂ組別に行った。Ａ組は、先発で冬休みを挟む時期、Ｂ組は後発で試験週直前まで、と状況が異なることもあって評価には微妙な差異が見られるが、概ね良好な評価が得られ、教育効果は上がっているといえる。レポート作成に関する指導も重視しているが、学生には相当重荷のようである。次年度はゆとりを持たせるなどの改善を行い、実習を充実させたい。

科目名：基礎医学実習Ⅴ　（医学科第４学年後期）
履修者数：１０６　配布数：９２　回収数：５１　回収率：５６．５％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.0	3.8	3.8	3.6	3.6	3.2	3.4	3.4	3.2	3.2	3.3	3.2	3.2

問14	問15	問16	問17	問18
3.2	3.3	3.2	3.2	

＊評価に対するコメント

基礎医学実習Ⅴコーディネーター　塩　野　　寛

社会医学３科目をコーディネイトとして試験前のこの時期に実習を行うのは、学生にとって十分身に入る実習が出来ないのかも知れない。

科目名：生命科学実習Ⅳ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９４　配布数：９２　回収数：９０　回収率：９７．８％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	4.2	4.1	4.0	4.3	4.3	3.6	4.0	4.1	4.3	3.6	3.9	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	4.0	3.9	4.1	

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅳコーディネーター　**渡　部　　剛**

本実習では、正常の人体組織の構築を理解することを目的として、正常組織標本の顕微鏡観察および代表的な病理像の示説・解説を行っている。今年は前年度の授業評価の結果を考慮して、実習プリントの内容を全面改訂した。変更点は、実習プリントに学習目標・到達目標や観察すべき構造を明記し各回の実習の目的を明確にしたこと、および、スケッチの提出を求める課題を各回３テーマに厳選したことである。その結果、前年度（総合生命科学実習Ⅲ）と比較して、今回の評価では各項目で平均0.3ポイント程度上昇し、実習方法の改善の効果が認められた。ただ相変わらず、受講学生の一部から「標本の数が多く、観察・スケッチするのが大変である。」という意見が寄せられたが、今後人類が進化して人体を構成する組織・器官の数が減るようなことでもない限り、医学全般の基礎としての組織学実習で、これ以上観察標本が減ることはないと思われる。また、ごく一部の学生から、「放課後も残ってスケッチをする人がいるが、そういうのは（評価される上で）不公平であるからやめさせて欲しい」という不思議なコメントをいただいた。しかしながら、向学心のある学生を積極的にサポートするのが大学の教官としての我々の仕事であるので、今後も、意欲のある学生が水曜日の午後などの空き時間に顕微鏡実習室や我々の研究室で自学自習することは歓迎したい。

科目名：生体観察実習　（看護学科第１学年後期）
履修者数：６０　配布数：５１　回収数：５０　回収率：９８．０％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.7	4.5	4.1	3.9	3.8	4.0	3.9	4.0	3.6	4.0	3.7	3.7	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.7	3.4	4.0	

＊評価に対するコメント

生体観察実習コーディネーター　**岩　元　　純**

前年度の評価（全項目の平均で、3.2）をいただいたが、これは合格ラインすれすれの評価であった。その際に学生から指摘された改善点として「生理学の講義をすべて終わらせてから実習をおこなう」という宿題をいただいており、翌平成14年度では、学生課にお願いして、１学年後期の10月にあった前のスケジュールを11月と12月に変更していただいた。また、各実習項目の教官のご努力も更にグレードアップしていたことが反映されて、全項目の平均点3.9と大幅に評価が改善したものと思われる。コーディネーターとしては胸をなでおろしている。講義と異なって、複数の教官の協力が必要な実習においては、コーディネーターの責務はもとより、各先生方の学識・実施能力・学生とのコミュニケーション能力も重要になってくる。その意味で、このような評価をいただいたことを励みに更なる改善に努力したい。

科目名：生命科学実習Ⅲ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９４　配布数：９１　回収数：９０　回収率：９８．９％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.7	4.3	4.1	3.8	3.8	4.1	3.5	3.8	3.6	3.7	3.4	3.7	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	4.0	3.8	3.9	

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅲコーディネーター　**山　内　一　也**

生命科学実習Ⅲの実習内容は、前期に学んだコンピューターリテラシーと統計学の初歩をエクセルや統計ソフトＳＰＳＳを用いて具体的に解くことにある。

クラスをＡ組、Ｂ組の２クラスに分け、Ａ組が生命科学実習Ⅱを受けているときは、Ｂ組は生命科学実習Ⅲを受けるというようにして、担当教官には負担増となるが、週２回の実習を展開した。

「あなた自身について」という評価の項では、2.7、4.3、4.1、3.8という評価であるが、問１の評価が低いのは実習当日にプリントを配布するためと思われる。問２、３、４の評価は学生自身もそれなりに評価していると思う。

「実習計画」という評価の項では、3.8、4.1、3.5、3.8、3.6という評価なので指導教官間の連携などをもう少し強化する必要があると考えられる。

「実習内容」という評価の項では、3.7、3.4、3.7、3.5という評価なので、実習のやり方にもう少し工夫を凝らす必要があるようである。

「実習環境」という評価の項では、3.8、4.0、3.8という評価なので一応の評価を受けたと考えられる。

「総合評価」は3.9なので一応の評価を受けたと思われる。

科目名：人間科学実習　（看護学科第１学年後期）
履修者数：６０　配布数：５９　回収数：５７　回収率：９６．６％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.3	4.4	4.2	3.8	3.7	4.3	3.5	3.7	3.7	3.7	3.4	3.7	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
4.0	4.0	4.0	3.8	

＊評価に対するコメント

人間科学実習コーディネーター　**林　　要喜知**

人間科学実習に対する学生の取り組みは極めて積極的であり、学生の意欲は極めて高い科目といえる。学生評価項目の平均点は3.8であり、他の実習科目と比較しても平均的な評価であると判断されるが、高い学生の意欲に必ずしも十分には応えていない点があると考えられた。そこで、学生の具体的なコメントを考慮し、以下の３点について改善したいと考えている。まず、１）実習内容ごとに大きく評価が異なるため、少なくとも、各々の内容ごと（例えば、生物学系、物理学および化学系）にわけて評価を実施したい。これにより、今後よりきめ細かく学生評価に対応できるであろう。また、２）他の実習科目（生体観察実習および基礎看護学実習）との重複時期があるため、レポート提出の作業時間が少ないと感じる学生が多かった。この重複に対しては、カリキュラム上の改善策を協議すべきであると考えている。また、３）今年度評価では、化学分野の実習課題に対する指摘が多かったため、それらをふまえて、実習内容量の軽減やレポート作成の指導方法について見直しするつもりである。

科目名：解剖学実習　（医学科第２学年後期）
履修者数：９８　　配布数：９６　　回収数：８９　　回収率：９２．７％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	3.9	3.9	3.8	4.1	4.2	3.8	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	4.1

問14	問15	問16	問17	問18
4.0	4.1	4.2	4.3	

＊評価に対するコメント

解剖学実習コーディネーター　吉　田　成　孝

全般としておおむね良好な評価が下っているものと考える。前年度は問７の教官数に関して平均3.3とやや厳しい評価であったが、本年度から１解剖の教官が１名増えたことで平均3.8と改善した。他の項目に関してはおおむね前年度と同じ評価である。その中で学生自身のいわば自己評価である「実習への取組」に対する問１と問２が前年度より0.3と0.4それぞれ低くなったのが目に付く。また、今回の評価で自由記載された意見も15件しかなかった（昨年度は35件）。実習に限らず何事にも積極的に参加する姿勢が欲しい。寄せられた意見の中では実習時間や回数が不足していることを指摘するものが複数あったが、実習の目標は現在の回数と時間数で達成できているものと考えられる。来年度から新たなカリキュラムのもとで、さらに充実した実習としたい。

臨地看護学実習企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　実習用の配付資料を読む等も含め、実習前の予習は十分でしたか。 問２　実習に積極的に参加したと思いますか。 問３　実習への取り組みは学習目標へ到達するための態度として適切なものでしたか。 問４　履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
実　習　計　画	問５　事前に実習目標と概要の説明がなされていましたか。 問６　実習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。 問７　学生数に対し、指導教官数と実習指導者数は適切でしたか。 問８　指導教官と実習指導者の連携はとれていましたか。
実　習　内　容	問９　これまでの学習内容を活用して実習を展開することができましたか。 問10　受け持ち患者の看護の難易度(コミュニケーションも含めて)は、適切でしたか。 問11　看護過程について、指導教官や実習指導者から明確な助言が得られましたか。 問12　看護技術を実践する機会が多く与えられましたか。 問13　カンファレンスにおいて、看護に関する明確な討議がなされましたか。 問14　実習記録・レポート等の量は適切でしたか。
実　習　環　境	問15　実習場の設備、機材、用具、物品等は必要十分な質と量でしたか。 問16　実習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問17　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総　合　評　価	問18　実習は看護の専門性に対する関心や意欲を高めましたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：老年看護学実習　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６６　　配布数：４３　　回収数：４３　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.8	4.5	4.2	3.6	3.1	3.7	2.9	2.8	3.4	3.5	3.7	3.6	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
2.9	3.5	3.5	3.2	3.3

＊評価に対するコメント

老年看護実習コーディネーター　野　村　紀　子

臨地看護学実習の改変と文部科学省の指針を受け、「老人看護学実習」は、３年生で実施することとなった。また、「老人看護学」担当の教官がいるにも関わらず、実習指導を拒否したという経緯もあって、急遽、老人看護学実習コーディネーターを決めたという事実があった。学生にとっては、雰囲気的に落ち着かない実習になってしまった。この結果が、問５、問９に現れていると考えられる。また、指導を担当した教官も、急なことで、十分な準備ができていないままでの実習指導となった。結果として、問７、８、９の評点が低い。この実習は、直接的な援助技術を展開する実習目標であったが、過去において経験のない出来事が起こったのも事実である。大事には至らなかったが、患者の安全が確保されなかったことである。結果として教官側は、厳しくならざるを得ず、問17の評点に及んだと考えられる。学生達にも、教官側においても、後味の悪さを残す実習となった。次年度から、このような問題を持ったまま実習に出なければならないことは、極力避けなければならないと強く反省している。

科目名：小児看護学実習Ⅰ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６６　　配布数：４３　　回収数：４３　　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.9	4.6	4.3	4.1	3.4	4.2	3.8	3.3	4.0	4.3	3.2	2.9	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
4.3	4.2	4.1	4.1	4.1

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅰコーディネーター　岡　田　洋　子

Ⅰ．小児看護学における小児看護学実習Ⅰ：
　健康な小児と家族・社会（小児の特徴、成長・発達、発達課題、小児の健康と家族・社会）に関する学習が修了し、学習内容がストレス・健康問題を有する小児と家族の理解・看護へと進行していく段階でプランされている。
　目的は、小児と接する体験が極めて少ない環境で育ってきた学生が、学んだ知識をベースに、以下の実際を学ぶことである。
　１）小児の特徴、小児の成長発達・発達課題、
　２）小児の社会化のプロセスにおける家族（社会）の役割・機能
　３）小児の保育に必要な基礎的知識・技術・態度の実際

Ⅱ．評価に関する感想：
　評価の平均は4.1と高い。学生自身に関する問いの中で最も高かった評価は、問２「実習に積極的に参加したと思いますか」の4.6であった。実習内容に関する問いの中で最も低かった評価は、問12「看護技術を実践する機会が多く与えられましたか」の2.9であった。
　実習課題への準備・動機づけ、実習時期、実習目標と方法、実習への主体的取り組み等について妥当な結果と評価する。最低の看護技術に関しては、小児看護学実習Ⅰの目的が、健康な小児とその保育に関する理解であるため、使用評価表（臨地看護学実習用）に限界があると考える。

科目名：地域看護学実習Ⅰ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６６　配布数：４３　回収数：４３　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	4.3	4.0	3.9	3.5	3.9	3.7	3.4	3.2	3.8	3.7	3.1	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	4.0	4.0	4.0	4.1

＊評価に対するコメント

地域看護学実習Ⅰコーディネーター　**北　村　久美子**

実習では、地域で生活する個人・家族・集団そして地域全体を看護の対象として捉え、対象のニーズに合わせた地域保健・看護の活動を実践できる基礎的能力を養うことを目的にしている。実習は、市町村役場、訪問看護ステーションを各１週間ずつ、10月から11月の期間にわたり、後半は雪降る中、家庭訪問をするという状況であった。

今回の評価から、学生は、積極的に実習に取り組んでおり、特に、地域看護の専門性に対する関心や意欲を高めたことが明らかになった。学生自身の努力と実習指導者、教官の指導の結果と思われる。

しかし、地域看護学の授業科目の一つが進行中のまま実習に入ったため、学習結果を十分に活用できなかった点も見られ、引き続き実習指導内容を検討する必要がある。なお、「問12」の看護技術の実践については、低い評価が見られるが、地域看護学実習における看護技術のとらえ方と実践についての理解を深めることが今後の検討課題と思われる。

学生の評価は謙虚に受け止め、さらに、より有意義で効果的な実習になるよう努力し改善していきたい。

科目名：看護過程論実習　（看護学科第２学年後期）
履修者数：６２　配布数：５９　回収数：５９　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	4.6	4.4	3.9	4.6	4.3	4.1	4.1	4.0	4.1	4.5	3.7	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.8	4.1	4.0	4.6

＊評価に対するコメント

看護過程論実習コーディネーター　**良　村　貞　子**

看護学科第２学年の５日間の病棟実習である。本実習は、１名の受け持ち患者に対し、健康状態をアセスメントし、看護問題を明確化して看護計画を立案し、実施及び評価するという看護過程を体験的に学習するものである。学生は看護過程に関し、指導教官や実習指導者から明確な助言が得られたとしており、看護の専門性に対する関心や意欲も高めることができたと答えている。したがって、昨年同様、学生自身が積極的に学習したこともあって、満足度の高い評価を得ることができた。

なお、学生からは病棟によって難易度の差が大きいとの指摘があったが、実習指導者とさらに連携を深め対応して行きたいと考える。また、一部の学生からは５日間では短いとの記載があったが、来年度からのいわゆる新・新カリキュラムでは２週間で実習を展開する予定である。

科目名：基礎看護学実習　（看護学科第１学年後期）
履修者数：５９　配布数：５８　回収数：５８　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.1	4.5	4.3	4.2	4.6	4.7	4.4	4.1	4.6	4.0	4.2	3.8	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
3.9	4.4	4.5	4.3	4.5

＊評価に対するコメント

基礎看護学実習コーディネーター　良　村　貞　子

看護学科第１学年の最初の病棟実習（５日間）である。実習場所は、本学の附属病院と旭川赤十字病院の２施設の病棟であり、学生はいずれかの施設で実習する。第１学年の実習では、看護に対する興味と学習のモチベーションを高めることをねらいとしているが、ほとんどの学生が総合評価で看護の専門性に対する関心や意欲を高めることができたと回答していた。これは「これまでの学習内容を活用して実習を展開することができたか」の問いに対する高い評価と関連するものと思われる。その一方で、数名の学生より、実習時期を試験の２週間前ではなく早くしてほしいとの希望があった。しかし、他の科目との進展状況とあわせ、現在のところ、この時期に実施することがよいと思われる。　とても実り多い実習であったとの自由記述もあり、今後も実習指導者とのよりよいの連携のもとで実習を展開したい。

体育実技企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　授業に積極的に参加したと思いますか。 問２　授業への取り組みは学習目標へ到達を目指す態度として適切なものでしたか。 問３　履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
授　業　計　画	問４　授業はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。 問５　学生数に対し、指導教官数は適切でしたか。 問６　指導教官間の連携は機能していましたか。
授　業　内　容	問７　事前指導は、実技を行う上で役立つ内容でしたか。 問８　授業によって課題の要点を理解し、基礎的な技術を習得できましたか。 問９　授業内容の難易度は適切でしたか。
授　業　環　境	問10　授業用の設備、機材、用具等は必要十分な性能と量でしたか。 問11　授業中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問12　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総　合　評　価	問13　この授業は価値のある内容と思われましたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：体育実技　（医学科・看護学科選択科目通年）
履修者数：２５　配布数：２４　回収数：２４　回収率：１００％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.6	4.4	4.1	3.8	4.1	4.0	3.4	4.2	4.3	4.2	4.1	4.2	4.5

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

非常勤講師　杉　山　喜　一

本授業では、スポーツの歴史や運動生理学に関する話題をガイダンスで取り上げ、各実技では、体力作り・コンディショニングに関する講義を交えながら、バレーボール、サッカー、テニス等の球技やバドミントンを中心にスポーツ活動を行った。学生自身の健康に対する意識や身体を動かすことへの欲求が高かったこともあり、授業に対する動機づけも高く、熱心に取り組む姿勢がみられた。今回の調査結果でも、全体的の平均値が4.2、ほとんどの項目で４以上の評価が得られた。一応学生のコメントを眺める限り、ほぼ学生の要求を満たすものであったといえるが、若干１名、最低点をつけた学生のコメントを参考にできなかったことが残念である。また本授業が、講義・実技で45時間の内容で構成されているにもかかわらず、何故１単位しかもらえないのかといった不満が多くの学生からきかれた。そこで授業科目名を保健体育に変更し、体力測定や運動処方等の講義を加えることで、本授業の２単位化について検討していただければ幸いである。

平成15年度　大学院入学者名簿

平成15年度博士課程入学者名簿

氏名	専攻	指導教官
一色　学	生体情報調節系	笹嶋唯博
村山賢起	生体情報調節系	岩崎　寛
菊池良子	細胞・器官系	石川睦男
金井麻子	細胞・器官系	石川睦男
金野陽高	細胞・器官系	髙後　裕
中野靖弘	細胞・器官系	髙後　裕
中村和正	生体情報調節系	髙後　裕
三好茂樹	生体防御機構系	髙後　裕
山口一豪	生体情報調節系	千葉　茂
若林義規	細胞・器官系	石川睦男
野村由香	生体防御機構系	原渕保明
泉　直宏	生体情報調節系	吉田晃敏
張　成宰	生体防御機構系	若宮伸隆

平成15年度修士課程入学者名簿

氏名	専攻	指導教官
宮川妃佐子	小児・家族看護学	岡田洋子
市川ゆかり	母子看護学	野村紀子
岡本和佳	精神保健看護学	新開淑子
遠藤舞子	小児・家族看護学	岡田洋子
小山満子	看護教育学	岡田洋子
荒井優気	基礎看護学	岩元　純
高野美奈子	精神保健看護学	新開淑子
中村聖子	看護教育学	岡田洋子
中島宣昭	精神保健看護学	新開淑子

新入生歓迎合宿が終わって

新入生歓迎実行委員会 医学科第２学年　土井　綾子

大学に入学してからあっという間に一年が過ぎ、今年も新入生歓迎合宿が行われた。

私は新歓委員としてこの合宿に参加したが、計画通り進まず、様々なハプニングもあった。しかし、係長をはじめ、新歓委員の協力体制のもと大きな混乱もなく無事合宿を終えることができ、ホッとしていると同時に嬉しい気持ちでいっぱいである。なぜなら、この合宿によって新入生のみならず、私達２年生の絆がより深まったからである。一人一人が係という枠をこえて積極的に動き、新入生と交流を深めてくれた。その結果からか、沢山の新入生が夜遅くまで新歓委員と語りあう光景を目にし、また後日、合宿が楽しかったという言葉を耳にして委員冥利につきる思いがした。もちろん反省すべきこともあるが、それは引き継ぎでカバーして、次の合宿も素晴らしいものにしてほしい。

研究室紹介

麻酔蘇生学教室　医局長　鈴　木　昭　広

医師になろうと入学し勉強している皆さんにとっては講義を聞くまでは「麻酔科」って何？といったところでしょう。手術に麻酔はつきものです。麻酔・蘇生科は手術時の麻酔を主な仕事とする科です。麻酔なしで手術する小説「海と毒薬」（映画もある）を読めば、麻酔がなぜ必要かがよく分かると思います。外科医が目的のために患者に痛みを伴う処置をしなければならない時、麻酔科医はその痛みや手術に伴う体の変化に対応し、患者さんの命を守り、手術の間・そして手術後にも快適でいられるようにする役割を果たします。

ある日の術前カンファレンスにて

当講座は初代小川秀道先生の後任として平成10年に札幌医科大学より着任された岩崎寛教授を中心に構成され、スタッフは主に手術時の麻酔を担当します。麻酔管理は患者さんの身体のあらゆる変化に時々刻々対応せねばならないことから、心肺蘇生にはじまり、救急医療や集中治療の知識・技術を駆使した仕事を行っています。救急部の助教授、集中治療部の講師に麻酔科から人が選ばれていることも麻酔科の業務の多様性を良く表しています。手術時の痛みのみならず日常生活の痛みもとれるようにとペインクリニックの外来も開設し、頭痛・腰痛・肩こりなどのありふれた痛みの治療にはじまり、癌末期の痛みなど緩和医療の充実も目指しています。

研究面では、気道の関門である喉頭の筋肉への麻酔薬の影響、妊娠が痛みの閾値を上げるメカニズムの探求のほか、留学帰りのものが麻酔薬と心筋リズム、麻酔薬と心筋保護に関する研究を行っています。現在アメリカに３名の留学者を出し、脳の海馬、心筋のイオンチャネル、脊髄の疼痛伝達機構などの分野で活躍中です。

常に明るくなごやかな雰囲気の中、岩崎教授が赴任以来蒔き続けた種がようやく芽を出し、花がこれから咲き始める、という活気あふれる教室です。講義、実習を是非楽しみにしていてください。

外国人留学生一覧

平成15年４月１日現在の外国人留学生は、大学院学生９名、学部学生１名の合計10名です。

日本に興味を持って来られた、学問と友好の使節の方々です。

同じ大学の中で学ぶ仲間として、会ったときには気軽に挨拶を交わしてください。

氏　　名	通　称	性別	国　籍	種　別	期　間	専　攻
BALJINNYAM, ERDENECHIMEG バルジンニャム　エルデネチメグ	エルデネ	女	モンゴル	大学院博士 第４学年	2000. 4. 1 ～ 2004. 3. 31	生体情報調節系
ZHAO, YAWEI (趙　亜薇) チョウ　ヤーウィ	チョウ	女	中　国	大学院博士 第３学年	2001. 4. 1 ～ 2005. 3. 31	細胞・器官系
ZHAO, CHUNLEI (趙　春雷) チョウ　チュンレイ	チョウ	男	中　国	大学院博士 第３学年	2001. 4. 1 ～ 2005. 3. 31	細胞・器官系
WANG, GUOLI (王　国丽) ワン　グォリ	ワン	女	中　国	大学院博士 第２学年	2002. 4. 1 ～ 2006. 3. 31	細胞・器官系
MAMUTI, WULAMU (馬木提　吾拉木) マムティ　ウラム	ウラム	男	中　国	大学院博士 第２学年	2002. 4. 1 ～ 2006. 3. 31	生体防御機構系
SATO, MARCELLO OTAKE サトウ　マルセロ　オオタケ	マルセロ	男	ブラジル	大学院博士 第２学年	2002. 4. 1 ～ 2006. 3. 31	生体防御機構系
XIAO, NING (肖　　寧) シャオ　ニン	シャオ	男	中　国	大学院博士 第２学年	2002. 4. 1 ～ 2006. 3. 31	生体防御機構系
GAO,YUQIN (高　玉琴) コー　ユーチン	コー	女	中　国	大学院修士 第２学年	2002. 4. 1 ～ 2004. 3. 31	看護管理学
JANG, SEONG JAE (張　成宰) チャン　ソンチェ	チャン	男	韓　国	大学院博士 第１学年	2003. 4. 1 ～ 2007. 3. 31	生体防御機構系
KHALILATI BARIZAH ハリラティー　バリザー	エラー	女	マレイシア	医学科 第５学年	1999. 4. 1 ～ 2005. 3. 31	

学生団体一覧

平成15年度承認された学位団体は以下のとおりです。

【体育系】

	団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考
1	ラグビー部	34	医4	越坂　純也	原渕　保明	継続
2	準硬式野球部	33	医5	寺村　紘一	吉田　晃敏	〃
3	卓球部	35	医3	坂上　悠太	谷口　成実	〃
4	陸上競技部	15	医4	長尾　知行	鈴木　裕	〃
5	競技スキー部	30	医4	松本　哲	小川　勝洋	〃
6	ゴルフ部	37	医4	金谷　穣	紀野　修一	〃
7	硬式庭球部	41	医4	齋藤　憲	田中　達也	〃
8	バドミントン部	45	医4	早坂　格	川村祐一郎	〃
9	男子バスケットボール部	20	医4	中川　正敏	千葉　茂	〃
10	空手道部	17	医3	岡田　尚也	相澤　仁志	〃
11	柔道部	4	医6	山内　直人	原渕　保明	〃
12	サッカー部	35	医4	河野　鉄平	菊池健次郎	〃
13	男子バレーボール部	17	医4	堀内　一宏	東　信良	〃
14	剣道部	24	医4	岩城　憲子	福澤　純	〃
15	山岳部	13	医4	久保　寛	佐藤　啓介	〃
16	弓道部	36	医3	松本　森作	吉田　逸朗	〃
17	ワンダーフォーゲル部	19	医3	竹内慎太郎	山内　一也	〃
18	大東流合気道部	21	医4	杉山　隆治	林　要喜知	〃
19	ソフトテニス部	44	医4	望月　宏樹	石川　睦男	〃
20	水泳部	43	医4	宝田　健平	石川　睦男	〃
21	基礎スキー部"SNOW INJECTION"	51	医3	佐々木　衛	油野　民雄	〃
22	サイクリングクラブ"ちゃりんこ"の会	11	医2	馬渡みずほ	山崎　浩	継続
23	女子バスケットボール部	12	医4	鈴木　裕子	千葉　茂	〃
24	ソフトボール同好会	10	医2	秋山　俊洋	近藤　均	〃
25	マラソンクラブ	6	医5	林　智志	飯塚　一	〃
26	女子バレーボール部	24	看3	高橋江理奈	谷本　光穂	〃
27	アイスホッケー部	26	医3	正司　裕隆	松野　丈夫	〃
28	男子ハンドボール部	22	医5	梅澤　耕学	上口勇次郎	〃
29	カヌー部	8	医5	古川　健太	宮本　和俊	〃
30	ビリヤード研究会	22	医3	大野　晋治	上口勇次郎	〃
31	女子ハンドボール部	20	看3	田中裕美子	上口勇次郎	〃
32	ピクニック同好会	12	医2	大原　賢三	近藤　均	〃
33	トライアスロン部	23	医2	長谷部拓夢	本間　龍也	〃
34	インラインホッケー部	23	医2	佐藤　剛	松野　丈夫	〃
35	スキューバ・ダイビング部	8	医5	梅澤　耕学	林　要喜知	〃
36	草野球同好会	28	医3	瀬野尾智哉	林　要喜知	〃
37	HMS～総合格闘技同好会～	35	医3	豊島　邦義	小川　勝洋	〃
38	ボーリング同好会	12	医5	魚嶋　晴紀	廣岡　憲造	〃
39	ツーリング同好会	14	医2	辻　祐美子	小川　勝洋	〃
40	ばすけ同好会	22	医5	水上　泰	林　要喜知	〃
	40団体	952				

【文化系】

	団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考
1	写真部	10	看1	井齋　広美	谷本　光穂	継続
2	医療研究会	11	医4	花香　真宣	宮本　和俊	〃
3	茶道部	25	医4	村越　康紀	坂本　尚志	〃
4	将棋部	10	医2	二村　麻美	上口勇次郎	〃
5	JAZZ研究会	5	医5	鈴木　達也	佐賀　祐司	〃
6	ギター部	20	医4	暮地本宙己	林　要喜知	〃
7	ロック研究会	49	医3	南　幸範	吉田　成孝	〃
8	聖書研究会	5	医4	花香　真宣	内藤　永	〃
9	ブラスアンサンブル	18	看3	前田　忠	北　進一	〃
10	室内合奏団	35	医4	中田　麻子	北　進一	〃
11	旅芸人倶楽部	44	医3	佐藤　和生	原渕　保明	〃
12	合唱部	46	医3	上村　明寛	小川　勝洋	〃
13	旅と鉄道研究会	8	医4	市來　一彦	平　義樹	〃
14	美術部	6	医4	梅村真知子	大日向　浩	〃
15	A.V.A(ボランテイア同好会)	87	看3	高橋江理奈	平　義樹	〃
16	華道部	12	看3	稲葉美貴子	中村　正雄	〃
17	園芸療法研究会	29	医3	桑谷　俊彦	安川　緑	継続
18	AMC²(エイエムシー スクウェア)	12	医2	伊藤　愛子	橋本　眞明	〃
19	蟲の会	8	医2	蓑輪　郁	伊藤　亮	〃
20	熱帯医学研究会	2	医4	久保　寛	伊藤　亮	〃
21	モルツの会	23	医5	佐藤　陽子	平　義樹	〃
22	囲碁将棋錬成会	8	医2	板谷　利	池上　将永	〃
23	かるた会	5	医2	田原　大地	松岡　悦子	〃
24	国際保健医療研究会	12	医4	峰　麻理子	吉田　貴彦	〃
25	シネマ同好会	23	医3	師尾　典子	渡部　剛	〃
26	手話サークル "Sign"	27	医4	野田　剛	内藤　永	〃
27	盆栽部	34	医3	松本　森作	布村　明彦	〃
28	民族文化研究会	29	医3	奥　大樹	吉田　成孝	新規
29	道の駅研究会	20	医3	瀬野尾智哉	林　要喜知	〃
30	図書館部	33	医2	神保　光一	近藤　均	〃
	30団体	656				

第45回東日本医科学生総合体育大会

第45回東日本医科学生総合体育大会（冬季大会スキー部門）が、３月14日(金)～３月20日(木)に秋田県田沢湖スキー場にて行われました。

男　子	アルペン　スーパー大回転	渡　辺　茂　樹	優　勝
		向井原　健　太	準優勝
		畑　中　憲　行	３　位
	大回転	渡　辺　茂　樹	準優勝
		松　本　　哲	３　位
	距　離　　リレーＡ戦　５km×４	旭川医科大学Ａ	３　位
	リレーＢ戦　４km×４	旭川医科大学Ｂ	優　勝
女　子	アルペン　スーパー大回転	矢　野　絢　子	優　勝
		前　田　千　晶	準優勝
		太　田　英里奈	３　位
	大回転	大　吉　信　子	優　勝
		矢　野　絢　子	〃
		前　田　千　晶	３　位
	回　転	太　田　英里奈	３　位
	距　離　　５km（フリー）	山　口　葉　子	優　勝
		小　林　智　絵	準優勝
		古　谷　曜　子	３　位
	３km(フリー)	山　口　葉　子	優　勝
		小　林　智　絵	準優勝
		古　谷　曜　子	３　位
	0.5kmスプリント　決勝	山　口　葉　子	優　勝
		小　林　智　絵	準優勝
	リレーＡ戦　４km×４	旭川医科大学	優　勝

このような、めざましい成績を残し、夏冬合わせての総合成績は、

男子部門		女子部門	
優　勝	旭川医科大学	優　勝	旭川医科大学
準優勝	筑波大学医学専門学群	準優勝	群馬大学医学部
３　位	自治医科大学	３　位	東京女子医科大学

となりました。

将来、医師、看護師になると、体力が財産となるような場面も出てきます。
今回の成績を思い出して、活躍されることを期待します。

（学生課）

平成14年度　学位記授与式

平成14年度学位記授与式が、３月25日（火）10時30分から本学体育館において行われました。

本学室内合奏団が奏でる調べのなかで、医学科92名、看護学科65名、合わせて157名の卒業生一人ひとりに学士学位記が、学長から手渡され、博士修了者18名に博士学位記が、修士修了者８名に修士学位記が、同じように手渡されました。

ついで、学長から卒業にあたり、式辞が述べられました。

（学生課）

平成15年度　入　学　式

医学科・看護学科の入学式が４月11日（金）10時から本学体育館において行われました。

式では、医学科90名、看護学科60名・看護学科第３学年編入生10名、合わせて160名の新入生を代表して医学科　相川忠夫くんが宣誓を行い、医学生・看護学生としての自覚を新たに、大学生活の第一歩を踏み出しました。

（学生課）

新入生合同研修実施される

今年は新入生の研修が、医学科、看護学科合同で４月21日（月）、22日（火）の２日間にわたり、本学にて行われました。

４月21日（月）の９時から、看護学科棟大講義室にてグループごとに着席し、片桐　副学長の挨拶に始まり、学年担当の心理学高橋教授からオリエンテーションを受けた後、医学科は早期体験実習について、看護学科は場所を変えて、今後の４年間の学習展望についての説明を受けました。

午後からは、先輩の医師、看護師の経験談やアドバイスを聞いた後、医学科が救急蘇生実習、看護学科が手話の実習を受け、医療現場の雰囲気を感じたところで１日目が終りました。

４月22日（火）は、「主体的学習への取り組み方について」又は「どのような医療従事者を目指したいか」という、本格的な課題についてのグループ討論とその発表から始まりました。皆、真面目に正面から取り組んでいましたが、分かりやすく流暢な話し方をしたり、イラストが綺麗だったりと、思わぬ能力を発揮する者もいました。

午後からは、「大学生のための心理学」、「健康を考える医学生らしい生活習慣のすすめ」、「ＨＩＶ感染の現状と課題について」、「アルコールとの正しい付合い方」と学生生活での道しるべになる講演を受けました。

（学生課）

訃　報

本学名誉教授 吉岡　一氏(78歳)には、平成15年4月15日㈫午後1時5分ご逝去されました。

同氏は昭和49年4月1日に小児科学講座初代教授として就任され、昭和56年7月1日から昭和60年6月30日まで医療担当副学長として医学部附属病院長を併任し、平成2年3月31日停年により退官されるまで永年にわたって、教育・研究に従事されました。

この間、同氏は、医学の研究並びに学部学生の教育及び研究生・大学院学生の研究指導にあたり、本学の発展に多大な貢献をなされました。

また、学術研究面では小児科学、特に小児感染症学・臨床薬理学を専門分野とし、その優れた研究業績は高く評価されております。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

教官の異動

辞　職	H15.3.31	看護学講座	教　授	前田　隆
〃	H15.3.31	看護学講座	助教授	佐藤　雅子
〃	H15.3.31	第三内科	講　師	藤本　佳範
〃	H15.3.31	小児科	講　師	室野　晃一
〃	H15.3.31	眼科	講　師	藤尾　直樹
〃	H15.3.31	産科婦人科	講　師	藤井　哲哉
昇　任	H15.4.1	物理学	助教授	本間　龍也
〃	H15.4.1	健康科学講座	講　師	伊藤　俊弘
〃	H15.4.1	第三内科	講　師	蘆田　知史
〃	H15.4.1	小児科	講　師	梶野　浩樹
〃	H15.4.1	眼科	講　師	森　文彦
〃	H15.4.1	総合診療部	講　師	丹野　誠志
転　入	H15.4.1	看護学講座	教　授	服部ユカリ
転　出	H15.4.1	衛生学講座	講　師	松井　利仁
昇　任	H15.5.16	看護学講座	講　師	升田由美子

怒　外

歴　史　教授
近藤　均

哲学のない大学／歴史のある大学

本年、旭川医大では、一般教育の教官定員削減によって学科目「哲学」が廃止されようとしている。むろん「哲学」が不要だからというわけではない。たまたま空席になっているポストが「哲学」だからである。哲学（または倫理学）の専任教員のいない医科系大学は少ないし、そもそも、「哲学のない大学」というと「理念やビジョンのない大学」と誤解されてしまいそうである。しかし……。

19世紀ドイツの有名な哲学者フォイエルバッハの言葉に、Keine Philosophie, meine Philosophie.（哲学なんて存在しない、それが私の哲学だ）というのがある。当時、ヨーロッパの哲学界を風靡していたのはヘーゲルの観念論哲学であった。フォイエルバッハは、その体系が虚構であると批判して「哲学なんて存在しない」と言い放ったのである。やがて彼は、「私の哲学」として観念論に取って代わる唯物論を確立し、これはその後、科学的（？）社会主義とやらに発展的に吸収されて、良かれ悪しかれ社会変革の原動力のひとつとなった。だから、「哲学のない大学」というのも長い眼で見れば大学改革の原動力となるかもしれない。そしてこれが「歴史の教訓」となるかもしれない。

歴史といえば、「歴史」の専任教官を置いている国立大医学部はというと、旭川医大のほか、ごく少数である。そんなわけで、当該教官の私でさえ、「哲学」でなく「歴史」のポストを廃止できればよいのに、と思わないでもない。とはいえ、自らを「哲学者」と称している御仁のなかにも過去の偉人の業績をなぞるだけの「哲学史家」は大勢いるし、「歴史家」に分類されてはいても、おのれの歴史観を壮大なスケールで語っている「歴史哲学者」は少なくない。そういう意味では、「哲学」だの「歴史」だのと看板にこだわる必要はまったくないのである。専任教官の力が及ばない点は優秀な非常勤講師に補っていただけばよいし、現にそうしている。

なるほど旭川医大は「哲学のない大学」となって、糸の切れた凧さながらに行く末が案じられることになるかもしれない。しかしながら本学は、開設からまだ30年しか経っていないが、他の国立大医学部にはほとんど見られない「歴史のある大学」なのである。

（5月1日）